

価値論および分配論における

アダム・スミスとリカードウ（下）

岡崎栄松

一 問題の提起

二 価値論および分配論におけるA・スミスの二重性

〔一〕 投下労働説と支配労働説との交錯

〔二〕 分解価値説と構成価値説との交錯

〔三〕 A・スミスと「三位一体的範式」（以上、前号所載）

三 価値論および分配論におけるリカードウの一貫性（以下、本号所載）

〔一〕 価値論の確立と支配労働説の排除

〔二〕 分配論の展開と構成価値説の排除

〔三〕 リカードウと「三位一体的範式」

四 問題の総括

三 価値論および分配論におけるリカアドウの一貫性

〔一〕 価値論の確立と支配労働説の排除

これまでの考察をつうじてわれわれは、アダム・スミスの場合には価値論における投下労働説と支配労働説との交錯が、また分配論における分解価値説と構成価値説との交錯が特徴的であるという点、そして価値論および分配論におけるスミスのこの二重性は、彼が古典経済学者であると同時に俗流経済学者でもあったことを意味するという点を知ることができた。ところで、すでに一言したように、リカアドウにあつては価値論における投下労働説と支配労働説との交錯も、また分配論における分解価値説と構成価値説との交錯も見られない。むしろ反対に、リカアドウの場合には価値論および分配論における一貫性が特徴的である。けだし彼は、スミスの投下労働説と分解価値説とを継承することによって自己の価値論および分配論を確立・展開するばかりでなく、さらにすすんで、スミスの支配労働説と構成価値説とを可能なきぎり排除せんとするからである。かくてわれわれは、いまや価値論および分配論におけるリカアドウの一貫性を問題にしなければならない。

まず、価値論の領域におけるリカアドウの首尾一貫性を検討することからはじめよう。最初に、リカアドウ自身の語るところを聞けばつぎのごとくである。

「土地の生産物——労働と機械と資本との結合投下によつて土地の表面から取得されるいっさいのものは、共同社会の三階級のあいだに分割せられる。土地の所有者、耕作に必要な資財 (stock) すなわち資本の所有者、およびその勤勞によつて

土地の耕される労働者が、これである。

「しかしながら、社会の異なる段階においては、地代、利潤および賃金なる名称のもとにこれらの階級の各個に割当てられるべき土地の全生産物の比率もまた、大いに異なるであらう。」^(註)

これはいふまでもなく、『経済学および課税の原理』への序文の冒頭に見出される一文であるが、ここに明示されているように、リカードにおいては「土地の所有者」、「資本の所有者」および「労働者」が「共同社会の三階級」(three classes of the community)を構成するのであり、そして地代、利潤および賃金がこれら三階級の所得形態なのである。だがこのことは、リカードが、その理論的研究にさいして最初から、資本制生産様式の支配的な社会を想定していることを意味するものにほかならない。またリカードは、その名著『経済学および課税の原理』のいたるところで、ある生産部門から他の生産部門への資本の自由移動をまったく自明のこととして前提しているが、彼におけるこの基本的な前提もまた、彼がその理論的研究にあたって、発展せる資本制生産様式の支配を前提していることを意味するものにほかならない。^(註) リカードはこのように、あらかじめ資本制生産様式の支配的な社会を想定したうえで、かかる社会における諸商品の価値が何によって決定されるかを考察するのである。

〔註〕 さきに述べておいたように、アダム・スミスにあつては、まだ生産諸要因の資本制的形態が十全な意味では前提されていなかったのであるが、リカードにおいては、すでに生産諸要因の厳密な意味での資本制的形態が前提されている。すなわちリカードの場合には、そこでは生産諸要因の分配が完了しているところの、資本制生産様式の支配的な社会が前提されているのである。したがって、彼のいう「共同社会」なるものは資本制社会以外の何ものでもない。

もちろんリカードは、産業革命の進行過程——そこでは資本が、いつさいのものを支配する経済力として自己を確立す

る——の只中に生活したという歴史具体的な事実を基礎としてはじめて、生産諸要因の完全な意味での資本制的形態を前提したのではあるが、しかし、およそ現実には、純粹資本主義社会なるものは実存しうるはずがなく、したがってまた、リカアドウに与えられた客観的現実も、多かれ少かれ前近代的生産諸関係を内包するイギリス資本主義社会でしかありえなかつたことは自明である。それゆえに、なるほどリカアドウは事もなげに生産諸要因の独自の・資本制的形態を前提しているけれども、このことは、却つて彼が如何に強靱な抽象力を有していたかを物語るものであり、そしてそのかぎり、それは彼の優れた理論的腕前を示すものだと言ふことができよう。

ところでリカアドウは、右の問題を考察するにあつて、まず最初に、彫像、絵画、稀覯書、古銭、等々の価値が、これらを得ようと欲するものの資力や嗜好の変動に応じて変化することを承認し、かつ、これらの商品が日々市場で交換される商品大量中の極めて小なる部分をなすにすぎない点を指摘したのちに、さらにその歩をすすめて次のように主張する。

「されば、諸商品およびそれらの交換価値について論じ、また、それらの相対価格を規制する諸法則について論ずるにあつては、われわれはつねに、人間の努力によつてその量を増加しうるような、そしてその生産上に競争が無制限に作用しているような諸商品だけを念頭に置く。

「社会の初期の段階では、これらの諸商品の交換価値、すなわち一商品のどれだけが他の商品と交換に与えられるべきかを決定する規則は、ほとんどもつぱらそのおのにおのに費された比較的労働量に依存するものである。」⁽²⁾

ここでリカアドウは、「社会の初期の段階では」云々と語っているけれども、彼が実際に表象に浮べているのは、けつしてスミス流の「初期未開の社会」などではなく、資本制社会そのものにはかならない。このことは、彼がそのすぐあとで、「これらの諸商品の交換価値」を問題にしていることから明らかなるところであろう。と

いうのは「これらの諸商品」とは、「人間の努力によつてその量を増加しうるような、そしてその生産上に競争が無制限に作用しているような諸商品」、すなわち資本制社会で生産される諸商品にほかならないからである。

リカアドウはただ、彼が自己の所説を確証するものとして『国富論』から引用せんと欲した次の一文、すなわち「資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社会においては……」という例の一文と調子を合わせるためにのみ、「社会の初期の段階では」云々と述べたにすぎないのである。もちろん、こうしたことを平気でやりうるのは、歴史的な観点をまったく欠除するものだけではあるが、しかし、それにしてもリカアドウはどこまでも資本制社会で生産される諸商品をとりあつかっているのであり、しかも彼は、つぎの二点を主張しているのである。すなわち、(一) 商品の価値の大きさは、それに投ぜられた労働の量によつて規定されており、したがつて、「一商品にだけ他の商品と交換に与えられるべきか」は「ほとんどもつぱらそのおのおのに費された比較的労働量に依存する」という点、および、(二) この投下労働量による価値規定は、「人間の努力によつてその量を増加しうるような、そしてその生産上に競争が無制限に作用しているような諸商品」にのみ妥当するという点がある。

まず、リカアドウが右の第一点を主張する場合には、彼はみずからの価値論の基本的命題をうちたてているのであつて、げんに彼は、これが「経済学におけるもつとも重要な学説」(a doctrine of the utmost importance in political economy)だと宣言することを忘れていない。だが、つぎに、リカアドウが右の第二点を強調する場合には、マルクスが評価しているように、彼リカアドウは、投下労働量による価値規定が一定の歴史的諸前提に依存することに少くとも感づいているのである。⁽³⁾これはもとより彼の功績である。

〔註〕 リカアドウ自身は、「諸商品の交換価値」は「ほとんどもつばらそのおのにおに費された比較的労働量に依存する」と云い、価値の大きさそのもの規定をとびこえて、いきなり「諸商品の交換価値」と「比較的労働量」とを関連させている（これが彼による価値形態の無視にもとづくことについては、のちにふれるであろう）。けれどもこの場合にも、投下労働量による価値規定が根底に横わっているのであって、リカアドウは、もつとも現象的な意味における交換価値、すなわち或る種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換せられる量の比率としての交換価値の概念にとらわれていたわけでは決してない。鈴木鴻一郎氏は、この点をS・ベイリーの「価値」概念と対比されながら、つぎのように指摘されている。——「リカアドウは、ベイリーとは反対に、商品は等しき価値をもつが故に一定の比例において交換され得る、と考えた。すなわち、リカアドウにおいては、ベイリーの謂わゆる相対価値の外に、それとは区別されたる価値概念が——絶対価値の概念が存するのであり、而かも後者は前者の基礎であつて、その多少は前者に變動を及ぼすものであると考えられているのである。リカアドウは、ベイリーの如く、表面に執着せず、一步奥へ入っているのである。」〔力点——引用者〕

こうした事情は、さらになお、リカアドウが一八二七年七月四日、トロワ宛に書き送った次の書簡においては、彼自身によつて明言されている。——「わたしは、一商品に費された労働がその交換価値 (exchangeable value) の尺度であるとは云わない。その積極価値 (positive value) の尺度であると言ふのである。そしてさらにわたしは、交換価値は積極価値によつて規制されるがゆえに、したがつて交換価値は費された労働の量によつて規制されることを附け加えておく。」⁽⁵⁾

しかしリカアドウは、価値法則の完全な実現のためには一定の歴史的諸条件が前提されねばならないことをただ感づいているにすぎないのであつて、けつしてこれを意識的にとらえはしなかつた。否、そればかりでなく、すでに述べたように、彼は他の古典経済学者たちよりもいつそう甚だしく資本制生産様式を絶対化し、ひどい「時代錯誤」にまで陥つてしまふのである。だとすれば、彼が労働のブルジョアの形態をまつたく自明のことと

して、これを労働の永久的な自然形態と見做すであろうこと、したがってまた、彼が価値の実体把握を少しも試みないであろうことは、容易に想像しようところである。事実、彼は、商品価値の実体をなす労働が如何なる性質のものであるかを全然理解しようとしてもしないで、最初から価値の大きさだけを問題にしながら次のように云っている。――「諸商品に実現せられた労働量がそれらの交換価値を規制するものとすれば、労働量の増加はつねに必ず、この増加の作用する商品の価値を増大させなければならず、また同様に、労働量の減少は必ずこれを低減させなければならぬ⁽⁶⁾。」と。実際リカアドウは、このことだけに關心をもつのである。つまり、彼にとつては、商品の価値の大きさは投下労働量によつて規制されるのだから、したがって投下労働量の増加とともに価値の大きさが増大し、逆にその減少とともに価値の大きさもまた低減せざるをえないということだけが問題なのである。

もつともリカアドウが、諸物の度量標準にかんするデステュット・ド・トランシーの所論を引用し、かつこれに賛意を表明したのちに、「フランは、フランと測定されるべき物とがそれら両者に共通な或る他の尺度に還元される場合のほかは、フランのつくられる同じ金属以外の物にたいしては価値の尺度ではない」と主張し、さらにひきつづいて、「わたしはこの還元は可能だと考える、というのは、それらはともに労働の所産だからである、したがって労働は、以つてそれらの眞実価値ならびに相対価値を評価しうべき共通の尺度である⁽⁷⁾」と論ずるときには、あたかも彼は商品価値の実体把握を試みているかのごとくである。

しかし、リカアドウがかく云う場合にも、彼は、商品価値の実体をなす労働が如何なる性質を有するかを立ち入つて問題にしているわけではない。なるほど彼は、たがいに質的に異なる諸物の大きさが、したがってまた諸

商品の価値の大きさが量的に比較されるためには、あらかじめそれらが同一の「或る他の尺度」に還元されていなければならないことを知っている。さらになお、彼はつぎのようにも考えている。——諸商品はいずれも労働の生産物なのだから、それらは労働という同一の「或る他の尺度」に還元される、だから諸商品の価値の大きさは相互に量的に比較されうる、と。しかし、リカアドウはただ、還元されるべき共通の単位が労働だと云うのみで、この労働の特殊な性質を立ち入って考察しようとはしていない。というよりも、労働のブルジョア的形態をその永久的な自然形態だと見做していたリカアドウにとっては、どのような性質の労働がこの還元されるべき共通の単位たりうるかという問題は、まったくどうでもよい問題だったのであり、したがってまた、商品価値の実体をなす労働の特殊な性質は、彼にとつてはこれを研究する必要もなかったのである。

かくしてわれわれは、リカアドウが最初から価値の大きさの問題だけにとらわれていて、商品価値を形成する労働の独自のな性格をば、正しく理解していなかったことを知るのである。だから、リカアドウにおいてもまた、商品の価値の大きさが社会的必要労働時間によってではなく、ただ漠然と投下労働量によって規定されていることは明らかである。しかもリカアドウは、商品価値の実体把握を試みなかったことにおいてA・スミスよりも劣っている。^(註)

〔註〕 この点は、スミス価値論にたいするリカアドウのつぎのような批判となつて現われる。——「アダム・スミスは、わたしが一度ならず指摘したように、その富の記述は当を得ているにもかかわらず、のちにいたつてこれに違つた説明を加えて、『ひと、彼が購買しうる労働の量に感じて、あるいは富み、あるいは貧しからざるをえない』と云っている。さて、この記述はいま一つの記述とは本質的に異なつているものであり、たしかに当を失つている。」^(註)

ここでリカアドウが『国富論』から引用している右の一句では、すでに見たように、スミスは投下労働量による価値規定をあたえているばかりでなく、社会的分業のもたらす変化に着目して、商品価値の実体把握を企ていたのである。ところがリカアドウは、この点を正當に理解することもなく、却つてスミスを誤解して、あたかもスミスがそこで支配労働説を展開しているかのように主張し、スミスのこの所論をば「たしかに當を失している」とまで云うのである。

とはいえリカアドウは、商品の使用価値をその交換価値の質料的担い手として把握したのであつて、この点では、彼が『経済学および課税の原理』第一章の劈頭で、使用価値と交換価値とにかんするスミスの敘述を肯定的に引用したのちに、さらにすすんで、つぎのごとく主張する場合に明瞭に示されている。いわく、「されば効用は交換価値にとつて絶対に不可欠なものではあるが、その尺度ではない。もし一商品が少しも有用でないとすれば、別言すれば、もしそれがわれわれの満足に少しも寄与しないとすれば、たとえそれがどんな稀少なものであろうとも、また、それを獲得するのにどれほど多くの労働量が必要であらうとも、その商品は交換価値を欠くであらう。」と。ここでリカアドウが、総じて物が無用であれば、それに投下されている労働もまた無用であり、したがつてその労働は交換価値の措定者たりえないという点を把握して、使用価値を交換価値の質料的担い手と見做していることは、まったく疑問の余地がない。

けれどもリカアドウは、使用価値と交換価値とのあいだに緊密な依存関係が存することを明言したばかりではない。そうではなく、彼はその歩をすすめて、使用価値と価値との対立的関係をも問題にするのである。これを彼自身に語らせればこうである。

「アダム・スミスはいう。——『およそひとが富裕であるか貧乏であるかは、彼が生活必需品、便益品ならびに娯楽品を享受しうる程度に應ずるものである。』と。」

「されば価値は、富とは本質的に異なるものである。^(註)なぜなら、価値は潤沢によって定まるのではなくして、生産の難易いかんによって定まるものだからである。製造業に従事する一〇〇万人の労働は、つねに同一の価値を生産するであろうが、しかし、必ずしも同一の富を生産しはしないであろう。機械の発明により、熟練の進歩により、分業の改善により、あるいはまた、いつそう有利な交換をおこないうる新市場の発見によって、社会の或る状態における一〇〇万人は、べつの状態において彼らが生産しうる富すなわち『必需品、便益品ならびに娯楽品』の二倍もしくは三倍の数量を生産するかも知れないが、しかし価値は、そのために少しも増加しないであろう。」⁽¹⁰⁾

かようにリカアドウは、生産力の発展はつねに「必需品、便益品ならびに娯楽品」——つまり使用価値——の量を増大させるが、それは必ずしも価値の増加をもたらすとは限らないと説き、かつこの点を例証するのである。のみならず、リカアドウはべつの箇所では、生産力の発展が却つて価値を減少させる場合をすら挙げている（ただし彼は、不変資本の存在を度外視することよつてのみ、かく考えることができたのだが）。したがつて、リカアドウが使用価値と価値との対立的関係を見抜いていたことは疑いえないところである。

〔註〕 ここに明示されているように、リカアドウは、スミスの「富」概念が社会的分業の出現を契機として「富」——社会的富（交換価値）になっている点にまったく気づくことなく、スミスの「富」概念をたんなる質料的富あるいは使用価値に一面化するのである。もつともリカアドウは、われわれが彼によるスミス価値論の誤解を示すものとして先に引用した一文にひきつづいてスミスの支配労働説に批判を加えるにさいしては、「富」なる概念のもとに交換価値を意味せしめている（このことはスミスの社会的分業以後の「富」概念が「富」——交換価値だといわれわれの見解を裏づけるものであろう）が、しかし、これはあくまでも例外にすぎず、彼はむしろ積極的に、スミスの「富」概念を「必需品、便益品ならびに娯楽品」つまり使用価値そのものに一面化しようとするのである。だがリカアドウは、マルサスとは異なつて、かかるものとしての「富」

をば、価値とともに商品、要因をなすものと見做しているのであって、この点は注意を要するところである。そこで念のため、リカアドウの「富」概念を彼の「商品」把握と関連させて考えれば、商品 \wedge 使用価値 \parallel 「富」 \wedge 交換価値 \parallel 価値 というシェーマが得られることになる。

かくてわれわれは、いまやつぎのようことができるであろう。——リカアドウは、商品の使用価値をその交換価値の質料的担い手として把握しながら、これら兩者のあいだの密接な依存関係を明言したばかりでなく、商品の二要因たる使用価値および価値の対立的関係をも分析した、と。いうまでもなく、これは彼の科学的功績であり、アダム・スミスからの彼の一步前進を意味するものである。なぜなら A・スミスは、社会的分業の出現を契機として「対象物」あるいは労働生産物が商品 \parallel 交換価値に転化すると考えて、自己の研究対象から使用価値の問題を駆逐してしまつたのにたいし、いまやリカアドウは、使用価値および交換価値を商品の二要因として把握しつつ、これら兩者の依存関係と対立関係を研究したからである。

しかしリカアドウは、価値において表示される労働を、使用価値に結果するかぎりでの労働からはつきりとは区別しなかつた。すなわち彼は、商品で表示される労働の二者鬭争的性格を明白な意識をもつて把握しはしなかつた。マルクスは、リカアドウ価値論におけるこの根本的な欠陥を批判して、つぎのように云っている。——「彼〔リカアドウ——引用者〕自身は、二重に表示されている労働の二者鬭争的性格をほとんど判別していないのであって、ために彼は、『価値および富、それらの相異なる諸属性』という全章において、J・B・セーごときの愚論と御苦勞にも渡り合わねばならない態たらくである。」〔力点——マルクス〕 だが、リカアドウがその歴史的観点の欠除のために資本制生産様式を極端に絶対視して、価値の実体把握をまったく試みなかつたことを想えば、

彼が商品で表示される労働の二者闘争的性格を正しく理解しえなかつたことは、むしろ当然すぎるとさえ云えよう。

ところが、こうした事情はやがてリカアドウをして、商品の価値形態をば商品価値の本性そのものにとつてまったく外的なものと考えさせることになるのであつて、げんに彼はつぎのように述べている。——「わたしは、ある商品には一、〇〇〇ポンドを要するだけの労働が投ぜられ、また別の商品には二、〇〇〇ポンドを要するだけの労働が投ぜられているから、前者は一、〇〇〇ポンドの価値があり、後者は二、〇〇〇ポンドの価値があるはずだとは云つていない。わたしはただ、これらの商品の相互にたいする価値は、一にたいする二であり、だからまた、これらの商品はこの比率において交換されるであろうと云つたのである。この学説の当否いかんにとつては、これらの商品の一方が一、一〇〇ポンドに売れて、他方が二、二〇〇ポンドに売れるか、あるいは一方が一五〇〇ポンドに売れて、他方が三、〇〇〇ポンドに売れるかは問うに足らないところである。この問題は、いまこれを論じない。わたしはただつぎの点だけを確言しておく。すなわち、それらの商品の相対価値は、それらの生産に投ぜられた労働の相対量によつて支配せられるであろうという点⁽¹²⁾が、これである。」

かようにリカアドウは、ある商品と他の商品とが如何なる割合で交換されるかということだけに関心をもち、価値を交換価値たらしめるところの価値の形態をば、あるいは彼自身の概念で云えば、「絶対価値」(absolute value)と「相対価値」(relative value)との内的関連をば少しも問題にしないのである。換言すればリカアドウは、「なぜに労働が価値において、またその時間的継続による労働の度量が労働生産物の価値の大きさにおいてみずからを表示するかという問題」⁽¹³⁾〔力点——マルクス〕をまったく提起しさえしなかつたわけである。そこで

リカードウは、交換価値を価値の必然的な現象形態として把握することができず、労働を直接的に交換価値もしくは「相対価値」と関連せしめて、諸商品の交換価値はほとんどおのおのにおのに費された比較的労働量に依存するとか、あるいはまた、諸商品の「相対価値」はそれらの生産に投ぜられた労働の相対量によって支配されるとか主張するのである。

このようにリカードウは、商品の価値形態を無視して、商品と商品との交換を直接に労働と労働との交換に還元してしまつたのであるが、そこでまた彼は、貨幣の本質を正當に理解することができず、貨幣を一面的に流通手段としてのみ把握した。^{〔註〕}いわく、「生産物はつねに生産物によって買いとられるか、あるいは勤勞によつて買いとられる。貨幣は、それによつて交換がおこなわれるところの媒介物 (medium) たるにすぎない。」⁽¹⁴⁾と。なおリカードウが、あたかも商品流通が貨幣流通の結果であるかのように表象して、みずからの価値論に投下労働説とはまつたく相容れない貨幣論に貨幣数量説を展開したことは、ひとも知るごとくである。

〔註〕 リカードウは、かように商品流通をすっかり物々交換に還元するのであるが、さらに彼は、これを論拠として一般的過剰生産の可能性を否定するにいたつてゐる。——

「セー氏は、そもそも需要は生産によつてのみ制限せられるものであるから、一国内において使用しえない資本額なるものは存在しないということを遺憾なく説明した。

「なにびとも、消費するため、もしくは売却するため以外には生産をおこなうものではなく、また彼は、直接自分にとつて有用であるところの、あるいは将来の生産に貢献しうるところの、他の何らかの商品を購入するため以外には、けつして販売するものではない。だから彼は、生産することによつて必然的に、彼自身の諸財貨の消費者となるか、ないしは、だれか他人の諸財貨の購買者あるいは消費者となるのである。彼が、もつとも有利に生産しうる商品の何であるかを長いあいだ

知らずにおいて、自分の意図する目的、すなわち他の諸財貨を入手するという目的を達するなどは想像しうべくもない。したがって、彼が需要のない商品を継続的に生産するということは起りそうもないことである。⁽¹⁵⁾

セーの販路説を支持しながら、リカアドウが右のように主張する場合、彼リカアドウが、剰余価値の獲得を以ってその規定的モメントとする資本制生産をばたんなる商品生産に還元し、さらに後者を直接的生産物交換あるいは物々交換そのものに単純化するという道をたどって一般の過剰生産の可能性を否定していることは明らかであろう。

とはいえリカアドウは、ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的比率としての交換価値、つまりもつとも現象的な意味における交換価値の概念だけに気をとられていたわけでは決してない。彼にあってはあくまでも、交換価値あるは「相対価値」は価値の大きさに依存し、かつ後者はそれ自身、投下労働量によって左右されるものと考えられていたのである。すなわち、投下労働量の変動→価値の大きさの変動→交換価値あるいは「相対価値」の変動というのが、リカアドウの論理なのである。したがってリカアドウが、価値の説明にあたって価値そのものを前提するという例の悪循環に陥っていないことは明らかである。リカアドウは、ミスとは異なり、投下労働量による価値規定を支配労働量によるそれと同一視することなく、商品の価値の大きさをつねに投下労働量によって規定するのである。それゆえ、たとえ彼自身は、「わたしが読者の注意をひこうと欲する研究は、諸商品の相対価値における変動の結果にかんするものであつて、それらの絶対価値における変動の結果にかんするものではない」と言明したとしても、彼が「絶対価値」あるいは価値そのものを研究していることはいうまでもない。彼が研究しなかつたのは、くりかえして云えば、「絶対価値」と「相対価値」との内的関連である。

さて、本節におけるこれまでの検討から明らかになった諸点を要約しておこう。――(一) リカアドウは、価値法則の完全な実現のためには一定の歴史的諸条件が前提されねばならないという点に感づきはしたけれども、彼は、基本形態におけるブルジョアの労働を自明のことと解していたため、商品価値の実体把握を企てようとさえしなかった。(二) したがって彼においてもまた、商品価値の実体は不明瞭のままであり、そして価値の大きさもただ漠然と投下労働量によって規定されていたにすぎなかった。(三) しかしリカアドウは、使用価値と交換価値とを商品の二要因として把握し、かつそれらの依存関係と対立関係を研究した。(四) といえ彼は、商品において表示されている労働の二者闘争的性格を正當に理解することができなかった。(五) リカアドウは、資本制生産様式を生産の永久的な自然形態と見做したため、商品の価値形態あるいは交換価値が商品価値の必然的な現象形態である点を見逃して、商品の価値形態をまつたく問題にしなかった。(六) だからまた、彼は、貨幣の本質を正しく把握することができず、根本的に誤まつた貨幣理論たる貨幣数量説を展開して平然としていた。(七) しかしリカアドウは、投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定とを混同することなく、商品の価値をどこまでも投下労働量によって規定した。

だからこういえよう。――なるほどリカアドウは、理論的に重要な諸点でスミスよりも後退してさえているが、しかし彼は、みずからの価値論において二つの異質的な所説、すなわち投下労働説と支配労働説とを交錯的に展開しはしなかった、と。否、それはかりではない。リカアドウは、スミス投下労働説の継承をつうじて自分自身の価値論を確立すると同時に、この価値論にもついでスミスの皮相的な価値論＝支配労働説を極力排除せんとするのである。そこで以下、われわれは、スミスの支配労働説にたいしてリカアドウがどのような批判を加える

かを見ておくことにしよう。

ところでリカアドウは、ここではスミスが純粹に投下労働説を展開しているところの一連の章句をば、みずからの価値論の命題を確証するものとして引用したのちに、価値規定におけるスミスの不徹底さを批難して次のように主張する。——「かくも正確に交換価値の本源を決定したアダム・スミス、また首尾一貫のためには、いっさいの物の価値はその生産に投せられた労働の多少に応じて大小ありと主張しなければならなかったが、そのアダム・スミスは、彼自身、もう一つの価値の標準尺度をたてて、諸物の価値の大小はそれらがこの標準尺度のどれだけと交換されるかによって定まるものと云っている。彼は、あるときは穀物を、また別のときには労働を標準尺度として説いている。ただし労働は、一物の生産に投せられた労働量ではなくて、それが市場において支配しうる労働量である。しかも彼は、あたかもこの二者が同義であるかのように、また、ある人の労働能率が倍加し、ために、一商品の二倍量を生産しうるならば、その人は自己の労働にたいして必然的に従来の二倍の報酬を受けとるかのように説いている。」⁽¹⁷⁾〔力点——引用者〕

ここでのリカアドウの主張のうち、われわれが力点を附しておいた部分は、彼の誤解にもとづくところの、まったく不当な批難である。まず第一に、——アダム・スミスは、資本制社会では投下労働量と支配労働量とが同義であるなどとはどこにおいても云っていない。スミスは反対に、資本関係が出現するや否や、これら両者が一致しなくなる、つまり同義であることをやめる、それゆゑに投下労働量による価値規定は資本制社会ではその妥当性を止揚する、と論じたのであった。そしてこの場合、スミスが資本関係の出現によつてもたらされる変化に着目して、資本と賃労働とのあいだの交換を問題にしたことは、彼の大きな功績でさえあったのだ。ところが、

歴史的な観点を欠除するリカアドウは、スミス自身においては明確に区別されていたところの「初期未開の社会」と「文明社会」とを無造作に同一視して、スミスの功績を正しく評価することもなく、却つて彼を不当に批難するのである。^{〔註〕}

〔註〕 いまでもなく、リカアドウ自身は、資本と賃労働とのあいだの交換の問題をまったく提起することさえしなかったのであつて、この点で彼は、A・スミスよりもはるかに劣つてゐる。

しかし第二に。——アダム・スミスは、賃労働者の受けとる「報酬」が資本制社会において「労働能率」すなわち労働の生産力に依存するなどとも主張していない。それはかりでなく、スミスは、労働者がその労働生産物を全部的に取得しえなくなつたのちにはじめて、労働の生産力が本格的に発展するという点を極めて鋭く把握していたのである。しかるにリカアドウは、あたかもA・スミスが、労働の生産力の発展に比例して賃労働者の受けとる報酬つまり賃金も増大すると主張したかのように考へて、彼スミスに不当な批判を加えてゐるのである。

だが、これらの誤解は一応これを度外視するとしても、スミス支配労働説にたいするリカアドウの批判は、右の一文においては甚だしく曖昧なものとなつてゐる。けだしリカアドウは、スミスによる二つの価値規定——投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定——の混同を批判すべきまさにそのときに、べつの問題を、すなわち「不変の価値尺度」の問題をもちこんでゐるからである。

すでに見たように、アダム・スミスは、(一)投下労働量による価値規定と支配労働量によるそれとをこつちやにして、支配労働量を以つて内在的価値尺度だと見做し、かつ、(二)価値規定におけるかかる動揺のために、穀物や貴金属とともに支配労働量をも外在的価値尺度たらしめ、しかもこの支配労働量は、それ自身の価値におい

て不変なるがゆえに、もつとも正確な外在的価値尺度たりうると考えたのであった。したがって、リカアドウがスミス支配労働説を正しく批判するためには、彼はなによりもまず第一点を、すなわち価値規定におけるスミスの動搖を論難しなければならなかつたはずである。ところがリカアドウは、スミスが或るときは穀物を、また他のときには支配労働量を「もう一つの価値の標準尺度」(another standard measure of value)として採用したと批判する。だがスミスは、けつして穀物を内在的価値尺度たらしめようとはしなかつた。彼はただ、それを支配労働量および貴金属とともに外在的価値尺度として採用しただけである。それゆえ、リカアドウが右のようにスミスを批判する場合には、いうところの「もう一つの価値の標準尺度」なるものが、いったい内在的価値尺度を意味しているのか、それとも外在的価値尺度を意味しているのが不明瞭になつてくる。もつと正確に云えば、はたしてリカアドウは、スミスが支配労働量を内在的価値尺度たらしめた点を批判しているのか、それとも、これを外在的価値尺度として採用した点を論難しているのが曖昧になつてくる。かくて肝心の第一点への批判が、すなわちスミスによる二つの価値規定の混同への批判が、リカアドウの右の一文では非常に弱められているのである。だが実は、リカアドウ自身は、第一点にたいする批判と第二点への「批判」とを同時に展開しようとしていたのである。詳言すれば彼は、支配労働量あるいは「労働の価値」はつねに変動するものであるから、それは内在的価値尺度ではありえないということと、穀物や支配労働量は、それら自身の価値において可変なものであるがゆえに、それらはともに外在的価値尺度として機能しえないということとを、同時に論証しようとして試みているわけである。

けれども、リカアドウがかように、第一点への批判と第二点への「批判」とを交錯的に展開したとしても、そ

これは別に不思議なことではない。というのは、リカアドウは、貨幣の本質を正しく理解することができなかったために、外在的価値尺度たりうるのはひとり不変的価値を有する商品だけだと思ひ込み、かかる商品の存否を大いに気にしていたからである。別言すればリカアドウは實際、彼自身、内在的価値尺度にかんする問題と、いわゆる「不変の価値尺度」にかんする問題との双方に関心を抱いていたからである。

〔註〕たとえば、彼はつぎのように云っている。「それを生産するために同じ辛苦と労働との犠牲を必要とする商品だけが、その価値において——引用者）不変である。かかる商品をわれわれはまったく知らないけれども、しばらくそれを知るものとして仮説的にこれについて論じ、かつ説いて差支えないし、また、従来採用されてきた諸標準が悉く絶対的に無資格なることを明示することによって、経済学にかんするわれわれの知識を進歩せしめうるのである。」⁽¹⁸⁾

リカアドウが、いかなる商品も——だからまた「労働」も——それ自身の価値において不変ではありえない点を論証したのは、たしかに彼の功績である。しかし彼が、不変的価値を有する一商品を想定して、かかる商品だけが外在的価値尺度として機能しうるかのように主張する場合には、彼は「経済学にかんするわれわれの知識」を進歩せしめているどころではないのである。

このようにリカアドウは、「不変の価値尺度」の問題を混入させることによつて、スマス支配労働説にたいする自己の批判を著しく弱めているのであるが、しかし、さきの一文においてもリカアドウが、「かくも正確に交換価値の本源を決定したアダム・スマス、また首尾一貫のためには、いっさいの商品の価値はその生産に投ぜられた労働の多少に応じて大小ありと主張しなければならなかつた」と論難する場合には、彼はスマスを正当に批判しているとも云うべきである。また彼が、支配労働量あるいは「労働の価値」は他の諸商品の価値と同様、その変動を免れえない点を論証し、かつこれを強調する場合もそうである。なぜなら彼はこの場合には、支配労働量ある

いは「労働の価値」による価値規定が、価値の説明にあたって価値そのものを前提するという論理矛盾を意味する点を正しく示しているからである。のみならず、リカードウがつぎのように主張するさいには、彼は正当にも、「不変の価値尺度」にかんする問題から自己を解放して、価値規定におけるA・スミスの動搖を極めて効果的に批難し、かくしてスミス支配労働説に致命的な打撃をあたえているのである。

「アダム・スミスとともに、『なるほど、その労働を以つて購買しうる諸財貨の分量は、あるときはより多く、またあるときはより少いであろうが、変化するのは諸財貨の価値であつて、それらを購買する労働の価値ではない』、したがつて『ただ労働のみはそれ自身の価値において不変であつて、ただそれのみは、あらゆる商品があらゆる時代あらゆる場所において評価され比較されることの、窮極かつ真の標準である』と云うのは、けつして当を得ていない。——しかし、アダム・スミスがこれより以前にすでに云つていられるように、『種々の対象物を獲得するために必要とせられる労働量のあいだの比率は、これらの対象物を相互に交換するための規則となりうる唯一の事情であつたと思われる』と云い、あるいは換言すれば、商品の現在および過去の相対価値を決定するものは、労働が生産する諸商品の比較的数量であつて、その労働にたいして労働者と与えられる諸商品の比較的数量ではないと云うのは、正しいのである。⁽¹⁹⁾」

ここにおいてリカードウは、スミス支配労働説への批判者としての自己の面目を十分に發揮して、支配労働量による価値規定が「けつして当を得ていない」ことを断言し、かつ同時に、投下労働量による価値規定だけが「正しい」ことを宣言した。^(註)リカードウが、その価値論において投下労働説と支配労働説とを交錯させることなく、この理論領域においてどこまでも首尾一貫的たらんとしていることは、歴然たる事実である。

〔註〕リカードウは、その主著『原理』の再版にさいして次の一文を第一章第一節の標題たらしめることにより、この宣言をばさらに一段と強化したのである。いわく、「ある商品の価値、すなわちその商品が交換されるべき他の何らかの商品の

量は、その商品の生産に必要とせられる労働の相対量に依存するのであって、その労働にたいして支払われる報酬の多寡に依存するのではなかつた。⁽²⁾」

- (1) D. Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, ed. by E. C. K. Gonner, p. 1. 小泉信三訳「三ヶ一」。
- (2) D. Ricardo, *ibid.*, p. 7. 上掲書「八一〜九ページ」。
- (3) Vgl. K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Volksausg. bsgt. v. M.-E.-L.-Institut, S. 48. 宇高基輔訳「ハ三〜四ページ参照」。
- (4) 鈴木鴻一郎『リカーズ価値論の批判』(解説)「二二五〜二二六ページ」。
- (5) Letters of D. Ricardo to H. Trower and others, ed. by J. Bonnar, p. 151.
- (6) D. Ricardo, Principles, p. 8. 小泉訳「一〇〜一一ページ」。
- (7) D. Ricardo, *ibid.*, pp. 268-269. 上掲書「二七二〜二七三ページ」。
- (8) D. Ricardo, *ibid.*, p. 263. 上掲書「二七二〜二七三ページ」。
- (9) D. Ricardo, *ibid.*, pp. 5-6. 上掲書「七一〜八ページ」。
- (10) D. Ricardo, *ibid.*, p. 258. 上掲書「二六八〜二六九ページ」。
- (11) K. Marx, Das Kapital, herausg. v. F. Engels, I. Bd., S. 47, Anm. 37. 長谷部文雄訳「第一分冊」二七〇〜二七一ページ。
- (12) D. Ricardo, Principles, p. 39. 小泉訳「四二〜四三ページ」。
- (13) K. Marx, Das Kapital, I. Bd., S. 47. 長谷部訳「第二分冊」二六八〜二六九ページ。
- (14) D. Ricardo, Principles, p. 275. 小泉訳「二八五〜二八六ページ」。
- (15) D. Ricardo, *ibid.*, p. 273. 上掲書「二八三〜二八四ページ」。

- (16) D. Ricardo, *ibid.*, p. 16. 上掲書「一七〇ページ」。
 (17) D. Ricardo, *ibid.*, p. 8. 上掲書「一〇〇ページ」。
 (18) D. Ricardo, *ibid.*, p. 280. 上掲書「二七〇ページ」。
 (19) D. Ricardo, *ibid.*, p. 11. 上掲書「一三〇ページ」。
 (20) D. Ricardo, *ibid.*, p. 5. 上掲書「七〇ページ」。

三 価値論および分配論におけるリカアドウの一貫性

〔一〕 分配論の展開と構成価値説の排除

前節において見たように、リカアドウは、A・スマスから投下労働説を継承することによって自己の価値論を確立したのであるが、^{〔註〕}彼はさらにこの価値論にもとづいて、近代所得の三つの基本形態たる賃金、利潤および地代をいずれも商品価値の分解部分として把握する。しかも彼は、スマスとは異なって、その分配論において分解価値説と構成価値説とを交錯させることなく、あくまでも自己の価値論に立脚してその分配論に分解価値説を展開するのである。F・エンゲルスは、『資本論』第二卷への序文において、こうした事情を指摘しながら次のように述べている。——「リカアドウはすでに A・スマスよりも著しく前進している。彼は、なるほど A・スマスにあつてもすでに萌芽的には存在するが、しかし実際にはほとんど何時もふたたび忘れられているところの、あらたな価値論——この価値論はその後の全経済科学の出発点となつた——のうえに、彼の剰余価値

観をうちたてている。商品のうちに実現された労働量による商品価値の規定からして、彼は、労働者によって原料に附加された価値量の労働者と資本家とのあいだへの分配を、賃金と利潤（すなわちここでは剰余価値）とへのその分裂をみちびきだす。⁽¹⁾

〔註〕 しかしながら、いうまでもなく、リカアドウがその価値論を確立するためには、長年にわたる思惟の道程を必要とせざるをえなかつたし、また彼は、『原理』の出版後も、けつして価値論にかんする思索と研究をやめなかつた。そこで J・H・ホランダ―教授は、リカアドウ価値論の発展過程はこれを三つの時期に区分して考察するのが適當であるとしている。すなわち、まず、地金論争および地代論争が展開された第一期（一七九九年——一八一五年）、つぎに、その期間のうちに穀物条例論争がおこなわれ、かつ『原理』第一版が出版されたところの第二期（一八一三——一七七年）、そして最後に、リカアドウが主として書簡をつうじてマルサス、J・ミル、トロワ、セー、等々と論争した第三期（一八一七——二三年）がある。⁽²⁾とある。ところでわれわれは、価値論にかんするリカアドウの思惟過程にたいしてとくに、促進的な役割を果したのは、穀物条例をめぐるマルサスとの対立・論争であつたと考へる。

マルサスは、すでに一八一四年に、『穀物条例および穀物価格騰落のわが国の農業と一般的富とに及ぼす効果にかんする諸考察』という題名の小冊子を出版して、穀物条例についての自己の見解を世に問うたのであるが、ここではまだ、自由貿易にたいする彼の態度は十分明確だといえなかつた。しかるに彼は、翌年に公刊した二つの小冊子、すなわち『外国穀物輸出入制限政策にかんする見解の諸根拠』および『地代の性質と増大、ならびにそれが支配せられる諸原理にかんする研究』において、自由貿易にたいする自己の立場をきつぱりと表明した。すなわちマルサスは、地主的な観点から次のように主張したのである。——穀物関税による穀物価格の騰貴は賃金を上昇させると同時に地代をも増大させる、しかるに地代の増大は、とりもなおさず「一般的富」あるいは国富一般の増進を意味するものである、したがって、穀物価格の低落をもたらす自由貿易は国民的な利害と相容れないものである、と。

ところが、産業資本の見地に立つリカアドウは、マルサスのかかる地主的主張を駁すべく、一八一五年、『低廉な穀物価格が資本の利潤に及ぼす影響にかんする一試論』を公表して、自由貿易を擁護しながら次のように論じたのであった。——穀物関税の廃止に伴う穀価の低落はもちろん地代を減少させるが、しかし同時に賃金をも低下させるのであって、賃金低下がもたらす利潤の増大は必然的に資本の蓄積を促進し、かくして産業全般の繁栄をよびおこすものである、したがって、保護貿易ではなく、まさに自由貿易こそが国民的利益と一致するのである、と。

ところで、リカアドウが『一試論』で展開した右の所論においてもっとも重要な論理的媒介環をなしているのは、われわれが力点を附しておいた部分である。つまり、賃金と利潤との対立的関係にかんする彼の見解である。だからリカアドウは、自由貿易の正当性を理論的に根拠づけるためには、ぜひともつぎの点を、すなわち賃金の低落は必然的に利潤を増大せしめ、逆に、穀物関税の存続にともなう賃金の上昇は物価を騰貴させずに利潤を減少せしめるという点を証明しなければならなかった。しかるに、この点を証明するためにはまた、物価あるいは商品価値が賃金によってではなく、投下労働量によって規定されるということが明らかにされねばならなかった。そして事実、リカアドウは、『一試論』においてもすでに投下労働説を展開しているのであり、また彼は、さらにすんで支配労働説に批判を加えてさえているのである。これらの点は、『一試論』において彼リカアドウが、「すべての商品の交換価値は、その生産の諸困難が増大するにつれて騰貴する。……競争が完全な効果を有しえて、商品の生産が或る種の葡萄の場合のように自然によって制限されていない場合には、どこにおいても、その生産の難易が結局のところそれらの交換価値を規定するであらう」と述べ、また彼が、明らかにスマイスとマルサスを念頭に置きながら、「穀価が他のすべての物の価格を規定すると考えられてきた。わたしには、これは誤まりだと思われる」と断じていることから、うかがい知ることができよう。

かようにリカアドウは、穀物条例存続の適否という極めて現実的な問題をめぐってのマルサスとの対立・論争を直接の契機として、賃金、利潤および地代の相互関係を研究せざるをえなくなり、またこの分配論研究のプロセスにおいて価値論の

重要性を認識するにいたつたのである。そしてこの認識にもとづいて、彼はやがてスミス価値論の批判的研究に専念することとなつたのであつた。われわれが、価値論についてのリカアドウの思惟過程にたいしてとくに促進的な役割を果したのは穀物条例をめぐるマルサスとの対立・論争であつたと云う所以である。

しかしリカアドウは、『一試論』においてはまだ、その価値論⁽⁴⁾投下労働説を確立してはいないし、また、意識的にこれに立脚して自己の分配論を展開しようとしていない。したがつて、そこではまだ価値論と分配論との密接な連繫は見られないのであつて、まさにこの点に、『一試論』における分配論と『原理』における分配論との相違があるといえよう。『原理』では、リカアドウは、その価値論を確立することによつて、たんにスミスの皮相的な見解を批判するばかりでなく、同時に、『一試論』で彼自身が展開した分配論をも再検討しているのである。だからわれわれは、『一試論』における分配論と『原理』におけるそれとの相違を軽視される東嘉生氏の見解⁽⁵⁾にたいしては同意しがたい。『一試論』の学説史的意義は、そこで展開されている分配論そのものの科学性にあるというよりも、リカアドウが、当時の現実的な諸問題を産業資本の立場から鋭く分析することにより、賃金・資本・利潤・地代といった具体的諸範疇の考察をつうじて次第に下向の過程を辿りつつあつた事情を、それが如実に示している点にあると云わねばならない。なお、『原理』において展開されている分配論が、価値論⁽⁶⁾投下労働説と如何に密接な関連をもっているかは、やがて行論のうちにも明らかになるであらう。

さてリカアドウは A・スミスと同じように、重農主義者流の「平均賃金」の思想を抱いている。すなわち、リカアドウもまた、賃金は労働者が彼およびその家族の生活を標準的な状態で維持するために十分なだけの生活資料でなければならぬと考へていたのである⁽⁶⁾。ところで、リカアドウはその価値論において投下労働説を貫徹しようとしていたのであるから、彼は当然、この生活資料をも首尾一貫的に投下労働量によつて規定するもののように思われるであらう。しかし、事實は必ずしもそうではない。というのは、リカアドウは「労働力」範疇を

定立しえなかつたため、賃金が労働力の生産および再生産に必要な労働時間によって規定されている点をはつきりと理解することができず、その結果、「労働の価値」は労働者が受けとる貨幣を生産するに必要な労働量によって定まると主張するにいたっているからである。これを彼自身に語らせると、こうである。——「何度でも繰り返す必要のあることだが、利潤は名目賃金ではなくて、眞実賃金に依存する。すなわち、それは、年々労働者に支払われるであろうところのポンドの数量によってではなくて、これらのポンドを取得するために必要な日々の労働の量によって定まるのである。」〔力点——リカアドウ〕

なるほどリカアドウは、ここで「名目賃金」(nominal wages)と「眞実賃金」(real wages)とを區別して、「眞実賃金」というのは労働者が受けとるポンドを生産するために必要な労働量であるとしている。しかし、リカアドウがこのように、投下労働説の貫徹を目指す彼らしく、「眞実賃金」とは労働者が受けとる貨幣量そのものではなくて、それを生産するのに必要な労働量だと考えてみたところで、なんら問題の解決があたえられるわけではない。これはただ、労働と労働力とを混同する彼の苦しい逃口上にすぎないというほかない。けだし、いづれにしてもリカアドウが、賃金をば「労働力」商品の生産および再生産に必要な労働量によってではなくて、労働者が受けとるところのものによって規定していることには変りがないからである。かくてこの場合には、リカアドウは、その投下労働説を放棄して彼自身、かの悪循環に陥っているのである。^{〔註〕}

〔註〕 周知のように、この点は、リカアドウ価値論の批判を目指すS・ベイリーが大いに喜んで論難した点である。念のため、われわれは左に当該箇所を引用しておく。

「リカアドウ氏は、価値は生産に用いられた労働量に依存するといふ彼の学説を、一見したところ脅威する恐れのある難点

を実に巧みに避けるのである。この原理が厳密に貫かれるならば、労働の価値はそれを生産するのに用いられた労働量に依存するということになる。——これは明らかに不合理である。したがってリカアドウ氏は、巧みに論鋒を転じて、労働の価値をば、賃金を生産するに必要とせられた労働量に依存せしめるのである。あるいは彼自身の言葉で云えば、彼は、労働の価値は賃金を生産するに必要とせられた労働量によって評価されるべきであると主張するのである。ここに彼の意味するところは、労働者に与えられる貨幣または諸商品を生産するために必要とされた労働量のことである。これはつぎのよういうのと同じである。——布の価値は、その生産に投ぜられた労働量によってではなくて、布と交換される場所の銀の生産に投ぜられた労働量によって評価されるべきである、と。」〔力点——ベイヤリ〕

けれどもリカアドウは、いつもこのような悪循環に陥っていたわけではない。彼がその分解価値説を展開する場合には、彼は事実上、労働者を労働力なる商品の所有者と見做し、かつ、この労働力の価値が他の諸商品の価値と同様にその生産および再生産に必要な労働量によって規定されていること、したがってまた労働力の価値が結局のところ、労働力の再生産に必要な生活資料の価値に等しいことを、ともかくもとらえているのである。たとえば、彼はつぎのようにいつている。——「もし他のいつさいの物にたいして労働の価値が非常に甚だしく下落し、しかもその下落は、穀物およびその他の労働者の必需品の生産上における大きな便益によって助長された供給過多の結果であることを知りえたとするならば、穀物および必需品の価値は、それらの生産に要する労働量が減退したために下落し、また労働者の生活がこのように容易に維持されるにいたったことがやがて労働の価値を下落させたと言ふのは、けだし当を得ているであらう。」⁽⁹⁾

この場合、リカアドウの論理は實際上、つぎのごとくである。すなわち、「労働の価値」あるいは賃金は労働力の再生産に必要な生活資料の価値に等しい、したがって、投下労働量の減少によって生活資料の価値が下落する

ならば、それに伴って賃金もまた下落することになる。つまり、マルクスのいうように、「労働と労働力との混同を別とすれば、リカアドウは、平均賃金すなわち労働の価値を正しく規定する」⁽¹⁰⁾のである。

ところでアダム・スミスは、利潤の源泉にかんする研究にとりわけ意をそそぎ、剰余価値を積極的に剰余労働に還元したのであるが、リカアドウ——生産および分配の資本制的形態を無造作に前提するリカアドウは、利潤の源泉についての研究を意識的におこなおうとは試みない。彼にとつては、利潤の存在はまったく自明のことなのである。しかも、「労働力」範疇を確立しなかつたことが、彼の「剰余価値」把握を非常に妨げている。というのは、もしひとが労働と労働力とを範疇的に区別しないならば、労働日が二つの部分に、すなわち労働力の価値の等価を生産するにすぎない必要労働時間と、これを越える剰余労働時間との二つの部分に分れることが見逃され、したがってまた剰余価値をこの剰余労働時間の対象化されたものとして把握することが不可能となるからである。かくてリカアドウにおいては、利潤あるいは剰余価値の本源は不明瞭のままである。マルクスは、この点を指摘して次のように述べている。いわく、「リカアドウは、資本制生産の眼前の事実から出発する。労働の価値は、労働がつくりだす生産物の価値よりも小さい。だから生産物の価値は、それを生産する労働の価値よりも、いかにえれば賃金の価値よりも大きい。生産物の価値のうち賃金の価値を超える剰余は、剰余価値である。……彼にあつては、生産物の価値が賃金の価値よりも大きいといふことは一つの事実 (eine Tatsache) である。いかにしてこの事実が成立するかは、ついに不明瞭のままである。全労働日は、賃金の生産に要する労働日の部分よりも大きい。なぜか？ それは明らかにはならない。」⁽¹¹⁾と。かようにリカアドウにおいては、剰余価値の本源をすすんで究明しようとする試みは見られないのである。だからまた彼は、剰余価値を明確に、生産過程におい

て剰余労働に還元してはいないのであつて、この点において彼はA・スミスよりもはるかに劣っている。

しかしながら、右に引用したマルクスの指摘からもすでに明らかのように、するどい現実理論感覚を有するリカアドウは、資本制生産の眼前の事実から出発しながら、利潤をばどこまでも商品価値の分解部分として把握するのである。このことを確認するために、われわれは『経済学および課税の原理』から次の二つの文章を引用しておく。

「賃金に充せられるものが少くなるに比例して、利潤に充せられるものは多くなるであろう。また、反対ならば、反対の結果が生ずるであろう。」（力点——リカアドウ）

「利潤は賃金の下落によるほかは断じて増加することがなく、また賃金の下落は、賃金がそれに費されるところの必需品(13)（註）の下落の結果としてのほかは起りえないということは、わたしが本書全巻を通じて説明しようと努めたところである。」

これらの文言を以つて見れば、リカアドウがつぎのように考えていたことは明らかである。——商品の価値は投下労働量によつて決定される、したがつてそれは、一定の時点においては一定の大いさである、しかるに労働者は、少くとも労働力の再生産に必要な生活資料の価値を賃金として受けとらねばならない、そして商品の価値からこの価値部分をさしひいた残余が利潤にほかならない、ゆえに賃金と利潤とは相互に逆比例する、のみならずこの運動の決定要因は賃金であつて、けつして利潤ではありえない、と。しかもリカアドウは、このような論理を、みずからの名著『原理』の全巻を通じて説明しようと努めたと云うのである。だから、リカアドウが利潤および賃金をともに商品価値の分解部分として把握していることはもはや疑問の余地がない。かくてわれわれは、リカアドウが資本制生産の眼前の事実から出発して、利潤を事実上、剰余価値としてとらえていたことを知

るのである。

〔註〕 この場合、リカアドウが労働日を一定不変と見做していること、いかえれば、ここで問題にされているのが絶対的剰余価値ではなくて、相対的剰余価値であることは明白である。否、リカアドウは、絶対的剰余価値については、どこにも語っていない。彼はそれを知らないのである。この点は、アダム・スミスにあつても同様である。すなわちマルクスが、「A・スミスは個数賃金を論ずる機会にただ偶然的に労働日の変動を暗示しているにすぎない」と云っていることからも知られるように、スミスもまた、ほとんどいつも労働日を一定不変と見做してしまつて、絶対的剰余価値論はこれを展開していないのである。したがつて、絶対的剰余価値論を展開しなかつたことにおいては、スミスとリカアドウとは軌を一にしていると云うことができる。

しかし、ここでわれわれの注意しなければならないのは、スミスにあつては相対的剰余価値論がまだ積極的に展開されてないのにたいし、リカアドウにおいてはそれがすでに可成り本格的に展開されているという点である。この点についての藤塚知義氏の見解は當を得ているように思われる。——「スミスは剰余価値の発源を生産過程において把握したが、相対的剰余価値が事実上認識されるのは、リカアドウにおいてはじめてである。リカアドウにおいては労働の生産性の増大が労働賃銀を低め(高め)それによつて利潤を高め(低め)るものとされ、従つて剰余価値の増大が労働の生産力の発達と正比例するものとして把握されているからである。(そしてこのことはもちろん産業革命の進行をその現実的基礎として、)それゆゑに『剰余価値学説史』においても、相対的剰余価値はスミスを扱う段においては未だ問題とされず、リカアドウを扱うところにおいてはじめて問題にされているのである。」〔力点——藤塚氏〕⁽¹⁵⁾

かくして賃金および利潤とともに商品価値の分解部分として把握したリカアドウは、さらにすすんで、近代的所有のもう一つの形態たる地代をも同じく商品価値の分解部分として理解する。いわく、「われわれは、社会の初

期の段階においては、土地の生産物の価値にたいする地主と労働者との分け前はともに僅少にすぎないこと、そしてこの分け前は、富の進歩と食物獲得の困難とに比例して増加するであろうことを明らかにした。われわれはまた、労働者の分け前の価値は食物の高価値のために増加するとはいえ、彼の実質的な分け前は減少するのに反し、地主のそれはたんにその価値においてだけでなく、その分量においても増加するという点を明らかにした。⁽¹⁶⁾

〔力点——リカアドウ〕

ここでもリカアドウは、「社会の初期の段階においては」云々と述べているが、しかし、彼が実際に念頭に置いているのは、ほかならぬ資本制社会である。そして彼は、きわめて明白に（実際、彼自身が力点を附している！）地代をば、「土地の生産物の価値にたいする地主……の分け前」だと云うのである。ここにわれわれは、リカアドウが地代を、いかに意識的に価値法則——すなわち投下労働量による価値規定——に立脚して説明しようとしているかを知ることができよう。^(註) まことにマルクスのいうごとく、「リカアドウをして抜き出さしめるものは、（ウエストにおいても正しい）関連が全然なかつたわけではないが）彼の地代論と彼の価値論との関連である。」⁽¹⁷⁾ かうにリカアドウは、賃金や利潤と同様、地代をも商品価値の分解部分として把握しているのである。

〔註〕 この点は、リカアドウがその地代論を展開するにあたって、まず問題を、土地所有とそれに伴って発生する地代とははたして投下労働量と無関係に商品の交換価値を変動させるであろうかというふうに提起したうえで、さらに、つぎのよう^(註)に主張していることから知られるところである。——「原生産物の比較的価値が騰貴する理由は、その取得された最終部分の生産により多くの労働が投せられるからであつて、地主に地代が支払われるからではない。穀物の価値は、地代を支払わない土地において生産がおこなわれる場合、もしくは、地代を支払わない資本部分を以つて生産がおこなわれる場合に、

その生産に投ぜられる労働量によって規制されるものである。穀物は、地代が支払われるから高価なのではなくて、穀物が高価だから地代が支払われるのである。⁽¹⁸⁾」

だからこういえよう。——リカアドウは、近代的所得の三つの基本形態たる賃金、利潤および地代をば、いずれも商品価値の分解部分だと解している、と。ところでこのことは、リカアドウが事実上、賃金を労働力の価値の転化形態として、また利潤および地代とともに剰余価値の転化形態として把握していることを意味するものにほかならない。つまりリカアドウは、商品価値が一定の歴史的に規定された生産諸要因——賃労働・資本・近代的土地所有——に媒介されて賃金、利潤および地代として、それぞれ労働者、資本家および土地所有者に帰属すると考えているのである。

しかしながら、リカアドウもまた、労働と労働力とを混同して賃金——「労働の価値」と見做してしまい、したがってまた剰余価値を固有の範疇として定立することができなかった。というよりも、彼は、資本家にとつての利潤の存在を最初から自明のこととして、その本源を立ち入って研究しようとさえしなかつたのである。そこでまたリカアドウは、スマイスと同様、日常的な諸用語をそのまま受けとることによつて、近代ブルジョア社会の内の編成にかんするみずからの分析を中途半端で打ち切っているのであり、労働者の所得と資本家および土地所有者の所得とのあいだの本質的な差異を不明瞭ならしめているのである。ここに、リカアドウ分配論の主要な限界の一つがあると云えよう。^(註)

〔註〕『経済原論』(上巻)における宇野弘蔵氏のつぎの所論は、とりわけリカアドウにかんじていいうるところであり、彼の分配論の缺陷を指摘したものであると思われる。——「労働賃銀なる形態は労働に対する報酬として、むしろ資本主義的

生産方法以前からある形態が商品化したる労働力の売買に援用されたものにすぎない。この形態が資本家と労働者との関係を不明瞭にするのは当然である。労働賃銀と資本の利潤とがつねに一方の増加は他方の減少となるといふような考え方も、この形態による剰余価値率の歪曲された表現に基くのである。それは労働賃銀を資本の利潤と同様に、一方は労働者の労働に対する所得、他方は資本家の資本に対する所得として理解し、労働者と資本家とは資本の生産過程における生産物を互に分配するものとする常識的なる経済的見解に外ならない。労働賃銀は利潤と同様な意味での所得ではない。一方は労働力なる商品の販売による代価であり、他方は資本の生産物の販売によって得られるにしても、それはすでに資本の生産過程そのもので獲得された剰余価値の実現にすぎない。⁽¹⁹⁾

とはいえリカアドウは、スミスとは異なつて、その分配論において分解価値説と構成価値説とを交錯的に展開することはしなかつた。いいかえれば、彼は、生産過程一般における質料的生産諸要因の機能から諸所得が発生し、この諸所得が交換価値を構成するという皮相的な見解をともしてはしなかつた。彼にあつては、賃金、利潤および地代はどこまでも商品価値の分解部分なのである。この点を評価しながら、マルクスはつぎのように述べている。——「リカアドウは、商品価格をこれらの構成部分〔賃金、利潤および地代——引用者〕に分割している。かくして価値の大きさが先在者である。構成諸部分の総和が一定の大きさとして前提され、これから出発されるのであつて、A・スミスがしばしば逆に、かつ彼自身より深い洞見に反してやつていふように、商品価値の大きさを、あとから構成諸部分の加算によつて引き出しはしなかつた。」⁽²⁰⁾と。リカアドウが賃金、利潤および地代を首尾一貫的に商品価値の分解部分として把握していることは、いまや明白であろう。実際リカアドウは、あくまでも価値論——投下労働説を基礎として分配論を展開したのであり、したがつて彼にあつては、その分配論は価値論と極めて密接な連繫をもつていふのである。^(註)

〔註〕ところがジイドは、この点をまったく理解していないのであって、げんに彼はつぎのようにさえ云っている。——「おそらくリカアドウ自身は、精巧な価値論を以って研究を始め、かつそれから分配の諸法則をひきだしたのではなくて、分配の諸法則を発見したのちに、あるいは彼がそう確信したのちに、この諸法則から価値論を推論したのである。」⁽²¹⁾

さきに一言したように、リカアドウはその『一試論』においてはまだ価値論を確立していなかったのであるからして、われわれは、リカアドウが最初から「精巧な価値論」を以って研究を始めたのではないというジイドの見解にかんしては、これに異論がない。けれども彼ジイドが、リカアドウは「分配の諸法則を発見したのちに、あるいは彼がそう確信したのちに、この諸法則から価値論を推論した」とする場合には、われわれは、かかる見解を文字どおり顛倒的な謬見だと考える。というのは、これまでの検討から明らかなように、リカアドウは、スミスから投下労働説を継承することによって自己の価値論を確立し、かつこの価値論にもとづいて分配論を展開したのであって、けつしてその逆に、分配論から価値論を「推論」したのではないからである。

ジイドが右のごとく主張する場合には、むしろ彼自身、あたかも分配の領域が生産の領域から独立に、自立的領域として存在しうるかのように表象し、また、あたかも価値論なき分配論の展開が可能であるかのように夢想しているのである。だからこそ彼は、リカアドウの学説を紹介するにあたって、——われわれはリカアドウの価値論についてはただ折にふれて闊説するにとどめ、主としてその分配論について述べねばならないと前置きして、実際そのとおりに敘述をすすめることもできたのだ。

しかし、ジイドがこのように、リカアドウにおける価値論と分配論との連繫を少しも理解していないのだとすれば、彼がリカアドウの価値論を正当に評価しえないであらうことも容易に想像しうるであろうである。そして事実、ジイドは、価値論におけるリカアドウの功績をすっかり見逃してしまつて、「われわれは、彼〔リカアドウ——引用者〕の価値論がそのもつと特徴的な業績をなすどころではないことを告白しなければならぬ。」⁽²²⁾とまで云っている！

さて、つぎにわれわれは、価値論を確立したりカアドウが、たんにその分配論—分解価値説を展開するだけにとどまらず、さらにその歩をすすめてスミス構成価値説に批判を加え、かくしてこれを徹底的に排除しようと努める事情を検討しておくことにしよう。

すでに見たように、アダム・スミスはつぎのように主張した。——資本が蓄積されるや否や、労働者はその労働の生産物を全部取得することができなくなり、彼はその生産物を資本家と分け合わねばならなくなる、したがって生産物の価値はいまや賃金と利潤とに分解し、そして投下労働量と支配労働量とはもはや一致しなくなる、だから資本制社会では投下労働説はその妥当性を止揚し、そこでは支配労働説だけが妥当することになる、と。ところで、リカアドウが、スミスをしてかように主張させるにいたった現実的・客観的な根拠を正當に理解することができず、却つてスミスを誤解してしまったこと、そしてリカアドウ自身は資本と賃労働とのあいだの交換の問題を提起することさえできなかったこと——これらの点については、われわれはそれをすでに指摘しておいた。しかしリカアドウが、価値の大きさそのものはその賃金と利潤への分裂とはなんの関係もないと解しつつ、スミスの所説をつぎのように反駁する場合には、彼はスミスを正當に批判しているのである。いわく、「魚と獣との比較的価値は、生産量がどれだけであるか、また普通賃金あるいは利潤の高低がどのようであるかを問わず、もつぱら、そのおのおのに実現された労働量によつて規制せられるであらう。」⁽²³⁾

ところで、支配労働説と構成価値説との観点に立つA・スミスは、賃金および利潤とともに交換価値の構成者あるいは構成部分であり、したがつて賃金の変動は当然、交換価値そのものの変動をひきおこさざるをえないと見做していた。しかるに、いまやリカアドウは、こうした俗流的な見解をば異常な熱意を以つて批判し、かつこ

れを極力排除せんと企てるのであって、たとえば彼はつぎのようにいつている。——「労働の賃金の減少は必ず利潤を上昇させるが、しかし諸商品の価格にたいしては、それは何らの影響も与えるものではない。」⁽²⁴⁾

しかしリカードウは、生産および分配の資本制的形態をまったく自明のものと見做し、したがってまた賃金、資本、利潤、等々の経済学的諸範疇を最初から混乱的に前提して、^(註)たがゆえに、価値の生産価格への転化の問題を正しく解決することができず、その結果、みずからの価値論に修正をほどこさざるをえなくなつた。かくてリカードウは、固定資本の耐久力が相違する場合、および、固定資本と流動資本との結合の割合が相違する場合には、投下労働量の多寡のほかに、他の一原因、つまり賃金の変動もまた諸商品の「相対価値」(実は、生産価格、なのだが)の変動をもたらしことになる^(註)と論じた。そこで論敵マルサスは、まさにこの点に批判の矢を集中して、リカードウをつぎのように攻撃したのであつた。——「なるほどリカードウ氏は、氏の諸法則にたいする顯著な例外をみずから認めている。けれども氏の例外、すなわち使用せられる固定資本の量が相違し、かつその耐久性の程度が相違する場合、また使用せられる流動資本の回収の時期が同じでない場合に属する商品種類を調べて見れば、それは非常な数にのぼるのであつて、ために法則は例外と見做され、例外は法則と見做されることに気づくであらう。」⁽²⁵⁾

〔註〕 周知のように、『経済学および課税の原理』(第三版)は三十二章をふくんでいるが、そのうち第八章から第十八章までの諸章では租税論が展開されており、第十九章から最後の章にいたる諸章では貿易論、地代論、蓄積論、等々が何の秩序もなく、附録的あるいは追加的に論述されている。のみならずリカードウは、あたかも突然思い出したかのように、第二十九章において再び租税を論じている。しかも、理論的な部分たる最初の六章そのものも、けつして秩序だつたものではない。

ところで、リカードウの主著『原理』がこのような構造をもつていたたのは、本文で述べたように、リカードウが賃金や利潤などの具体的諸範疇をあらかじめ混乱的に前提したうえで、さてこれらの範疇は、投下労働量による価値規定とどの程度まで一致し、またどの点で矛盾するかというふうな問題提起したからにはかならない。つまり、リカードウの問題提起の仕方そのものが、彼の著作の構造を制約しているわけである。そこでマルクスは、ひとも知るように、『原理』の編別構成をば「非常に風変わりな、しかも必然的に逆になった組み立て」〔力点——引用者〕と呼んだのであった。⁽²⁶⁾

ところが、隅谷三喜男氏は、その論文『リカードウ経済学序論』において、「我々は彼（リカードウ——引用者）の論理の展開が方法的に多くの欠陥を持っている事は承認しなければならないが、にも拘らずその中にリカードウなりの一つの方法論が堅持されている事も亦理解しなければならない」と主張され、『原理』の編別構成に一定の体系的な秩序が存在していることを力説されている。だが、上述したように、リカードウにあつてはその著作の構造は彼の問題意識と方法そのものによつて制約せられてるのであり、そしてむしろ無秩序性こそが『原理』の編別構成の特徴をなしているのである。

とはいえ、リカードウがその経済学の敘述を投下労働量による価値規定の展開から始め、価値論を『原理』の先頭に位置せしめたことは、学説史上、非常に重要な意義をもっている。ここでわれわれは、スミスにおいては『国富論』第一編が分業論を以つて始められ、同編第五章にいたつてはじめて価値論が論ぜられることを想起すべきである。実際W・リープクネヒトのいうごとく、「ダヴィッド・リカードウは、価値論を自己の経済学体系の先頭に置いた最初の人だつた」⁽²⁸⁾のである。

しかしリカードウは、このいわゆる「価値論の修正」の問題をとりあげることによつてスミスの皮相的な見解を、すなわち賃金および利潤はいずれも交換価値の構成部分だとする皮相的な見解を排除したのである。というのは、彼リカードウは、賃金の変動は「相対価値」に如何なる影響を及ぼすであろうかという問題に格別の関心をいだき、かつこの問題の検討をつうじて、賃金の昂騰は利潤をひきさげずに商品の価格を高めるとするスミスの意見とはまさに反対のことがおこりうることを示したからである。もつとも、リカードウがこの問題を非常に

重要視したことは、価値の生産価格への転化の問題を解決するという観点から見れば、彼にたいして甚だ阻止的な役割を果たしたのではあるが、にもかかわらず、リカアドウが先の問題を立ち入って考察することにより、スミスの皮相的な見解から袂を分けてこれを自己の分配論から排除したことは、あくまでもリカアドウの科学的功績をなすものとして高く評価されなければならない。

かくてわれわれは、リカアドウが、賃金および利潤を以って交換価値の構成者だとする A・スミスの皮相的な見解を批判することに多大の熱意を示したことを知ったのであるが、リカアドウはさらに、地代を交換価値の構成部分だと見做す A・スミスをば、語気をつよめて攻撃する。いわく、「もしも穀物の高価格が地代の原因ではなくて、その結果であるとするならば、価格は地代の高低によって比例的に影響せられ、地代は価格の一構成部分となるであろう。しかし、穀物価格の規制者たるものは、最大労働量を以って生産せられる穀物であり、したがって、地代はいささかもその価格の構成部分として這入らないし、また這入ることができないのである。それゆえアダム・スミスが、諸商品の交換価値を規制した最初の規則、すなわち諸商品が以って生産せられた比較的労働量は、土地の私有と地代の支払いとによって変更を蒙るものと想像するのは断じて当を得ておらぬ。」⁽²⁹⁾

もつとも、スミスにたいするリカアドウの批判は、ここではいささか一面的である。というのは、たしかにスミスは、地代を以って交換価値の構成者だと見做してしまつたが、しかし同時に、彼は他方では、無意識のうちにも投下労働説を保持しながら、利潤および賃金と同様、地代をも附加価値の分解部分としてとらえていたからである。けれどもわれわれは、D・リカアドウが、地代はけつして「諸商品の価格の一構成部分」(a component part of the price of commodities)ではありえない点を強調して、アダム・スミスを一面的になるほどまでに論難

したところに、むしろリカアドウが如何に意識的に地代を商品価値の分解部分として把握しようと欲していたかを見るべきであろう。実際において、科学的経済学の前進のためには、かかる一面的な批判さえも必要だったのである。

さて、以上の検討をつうじて明らかになった諸点を要約しておこう。——(一) リカアドウは、資本制生産様式を極度に絶対化していたため、資本家にとつての利潤の存在をまったく証明を要しないこととして、利潤あるいは剰余価値の源泉を問題にしようともしなかつた。(二) 同じ理由からしてリカアドウは、資本と賃労働との交換の問題を提起することさえできず、却つてスミスの所説を誤解してしまつた。(三) けれどもリカアドウは、資本制生産の眼前の事実から出発して、賃金、利潤および地代とともに商品価値の分解部分として把握した。(四) とはいえ、リカアドウにおいてもまた、労働力の価値の転化形態たる賃金と、剰余価値の転化形態たる利潤および地代とのあいだの本質的差異が不明瞭になつていた。(五) だがリカアドウは、あくまでも価値論 \parallel 投下労働説にもとづいて自己の分配論を展開した。(六) そればかりでなく、リカアドウは、スミス構成価値説に批判を加えてこれをみずからの分配論から完全に排除せんとした。(七) しかし、彼自身の価値論および分配論の限界に制約せられて、スミスにたいするリカアドウの批判はしばしば一面的になつており、したがつてまた、彼によるスミス構成価値説排除の試みは不徹底のままに終つてゐる。

これらが、本節での考察をつうじて判明した主要な諸点である。だからこういえよう。——リカアドウは、その分配論において分解価値説と構成価値説とを交錯せしめることなく、首尾一貫的に価値論 \parallel 投下労働説に立脚してその分配論を展開した、と。

- (1) K. Marx, Das Kapital, herausg. v. F. Engels, II. Bd., XIII. 長谷部訳、第五分冊、二九—三〇ページ。
- (2) Cf. J. H. Hollander, David Ricardo, p. 64.
- (3) D. Ricardo, Economic Essays, ed. by E. C. K. Gonner, pp. 233-234.
- (4) D. Ricardo, *ibid.*, p. 234.
- (5) 東嘉生・『穀物条例論および地代論』(解題)一七九ページ参照。
- (6) Cf. D. Ricardo, Principles, p. 70. 小泉訳、七四ページ参照。
- (7) D. Ricardo, *ibid.*, p. 124. 上掲書、一二八ページ。
- (8) S. Bailey, A Critical Dissertation, pp. 50-51. 鈴木鶴一郎訳、六四ページ。
- (9) D. Ricardo, Principles, p. 13. 小泉訳、一四ページ。
- (10) K. Marx, Theorien über den Mehrwert, herausg. v. K. Kautzky, II. Bd. I. Teil, S. 123. 大森義太郎訳、一—
ページ。
- (11) K. Marx, *ibid.*, II. Bd. I. Teil, SS. 125-126. 上掲書、一二〇ページ。
- (12) D. Ricardo, Principles, p. 404. 小泉訳、四〇八ページ。
- (13) D. Ricardo, *ibid.*, p. 112. 上掲書、一一六ページ。
- (14) K. Marx, Das Kapital, I. Bd., S. 504, Anm. 29. 長谷部訳、第三分冊、四五四ページ。
- (15) 藤塚知義・『アダム・スミス革命』、四〇ページ。
- (16) D. Ricardo, Principles, p. 89. 小泉訳、九三ページ。
- (17) K. Marx, Theorien, II. Bd. I. Teil, S. 194. 大森訳、一八三ページ。
- (18) D. Ricardo, Principles, pp. 51-52. 小泉訳、五五ページ。

- (19) 宇野弘蔵・『経済原論』(上巻)「一四三—一四四ページ」。
- (20) K. Marx, *Das Kapital*, II. Bd., S. 364. 長谷部訳、第七分冊、七七—七八ページ。
- (21) C. Gide, *A History of Economic Doctrines*, tran. by R. Richards, p. 140.
- (22) C. Gide, *ibid.*, p. 141.
- (23) D. Ricardo, *Principles*, p. 20. 小泉訳、二二—二三ページ。
- (24) D. Ricardo, *ibid.*, p. 113. 上掲書「一七—一八ページ」。
- (25) T. R. Malthus, *Definitions in Political Economy*, p. 27. 玉野井芳郎訳、二八—二九ページ。
- (26) K. Marx, *Theorien*, II. Bd. I. Teil, S. 5. 大森訳、六—七ページ。
- (27) 隅谷三喜男・『リカードウ経済学序論』(『経済学論集』第十九卷第三号所収)「一七—一八ページ」。
- (28) W. Liebknecht, *Zur Geschichte der Wertheorie in England*, S. 28.
- (29) D. Ricardo, *Principles*, p. 55. 小泉訳、五—六ページ。

三 価値論および分配論におけるリカードウの一貫性

〔三〕 リカードウと「三位一体的範式」

前一節の考察によって明らかにされたように、リカードウは、価値論および分配論の領域において、アダム・スミスからその科学的な所説を継承しつつ、その皮相的な所説を排除したのであった。いわばリカードウは、A スミスのなかに住む二人のスミス、すなわち科学的な観点に立つ彼と皮相的な観点に立つ彼とのうち、後者に批

判の矢を放つと同時に前者をあくまでも固守したのである。マルクスは、この点を指摘して次のように述べている。——「リカアドウはスミスとは反対に、価値および剰余価値をより首尾一貫的に、かつより鋭く展開しており、事実上、皮相的なA・スミスに反対して、科学的なA・スミスを固守している。」⁽¹⁾と。そこでリカアドウにあっては、投下労働説と支配労働説との交錯的な展開も、また分解価値説と構成価値説との動搖的な論述も見られず、むしろ反対に、価値論および分配論における一貫性が目立っていたのである。換言すればリカアドウは、つねにその科学的な価値論に立脚して自己の科学的分配論を展開したのである。したがってリカアドウが主著『原理』への序文において、「分配を規制する諸法則を確定すること——これが経済学の主要問題たるものである」⁽²⁾と云い、生産ではなくてまさに分配こそが経済学の本来の対象だと宣言したとしても、この場合、彼はけっして生産の領域から切りはなされた自立的領域としての分配を念頭に置いているわけではない。そうではなく、リカアドウは、その科学的な価値論にもとづいて分配論——分解価値説を展開し、かくしてブルジョアの生産諸関係の内的連絡を探究したがゆえにこそ、「本能的に分配諸形態をば、あたえられた社会における生産諸要因がみずからを固定させるところの、もつとも正確な表現として把握した」⁽³⁾のであり、そしてまた彼は、分配諸形態をかか
るものとしてとらえたからこそ、「分配を規制する諸法則を確定すること」が「経済学の主要問題」だと宣言したのである。それゆえ、われわれはつぎのようにいうことができよう。——リカアドウにおいては価値論と分配論とが極めて密接な連繫をもっているがゆえに、彼リカアドウが、賃金、利潤および地代といった資本制的分配諸形態の研究の必要性を力説する場合には、彼は却って生産を、しかも生産一般をではなく、事実上資本制生産を自己の研究対象として受けとっているのである、と。つまりリカアドウは、分配の資本制的形態の強調という廻

り道をとつて事実上、経済学の本来の対象は生産一般ではなくて一定の歴史的に規定された生産であり、そしてこの生産における人と人との社会的諸関係を究明することが斯学の任務だと語つてゐるのである。^(註)そしてこの点に、リカアドウによつてなされた「分配宣言」のもつ独自の意味内容があると云えよう。また同じこの点に、リカアドウがその価値論にもとづいて自己の分配論を展開したことの大きな科学的意義があると云わねばならない。かくてわれわれは、D・リカアドウがアダム・スミスよりもはるかに首尾一貫的に近代ブルジョア社会の内の編成の分析に従事したことを知るのである。

〔註〕しかるに小泉信三氏は、この点をすつかり見逃されてゐるのであつて、げんに氏は、経済学のテーマがスミスとリカアドウとはどのように相違しているかを問題にされながら、つぎのように主張されている。——「固よりアダム・スミスと雖も決して分配問題を措いて不問に附したものである。併し彼が『国富論』において第一の問題とする所は、その標題にも云う如く、国富の『本質』と『原因』とであつて労働の生産力は何によつて増進せられるか、又一定額の資本は、何れの用途に於て最も多く其生産的效果を發揮するかの問題が、即ちスミスの主として論ぜん⁴と欲する所のものであつた。然るにリカアドウは、経済学中心問題の所在を移した、即ち彼にあつては、是等の生産問題は、従令全然等閑に附せられることなきも、其体系中に於て占める位置は極めて従属的のものとせられたのである。」

リカアドウは、「経済学中心問題の所在」を「生産問題」から「分配問題」に移すことによつて、前者が自己の経済学体系において占める位置を「極めて従属的のもの」とした！かかる見解にたいしては、ひとは何と云うべきであらうか？この場合、小泉信三氏が、リカアドウにおける価値論と分配論との緊密な連繫をまったく見落されてゐることは明白である。否むしる、氏がかように主張される場合には、氏自身、「生産問題」と「分配問題」とが相互に自立的に存在しうるのかごとき表象を抱かれていますか？

しかしながら、アダム・スミスの場合、その投下労働説の欠陥が彼の分解価値説を大きく限界づけていたのと同様に、リカアドウにおいても、その価値論に内包されている根本的な欠陥が、すなわち労働の二重性にたいする不十分な把握が、彼の分配論を大きく限界づけることになる。以下われわれは、この間の事情をより立ち入って考察しておこう。

ところで A・スミスは、かの $v + m$ のドグマに陥って、あらゆる商品の価値は結局のところ賃金、利潤および地代に分解すると見做した（もつとも彼の科学的本能はこの見解を止揚したのではあるが）のであったが、リカアドウは、「諸商品に直接加えられた労働だけでなく、かかる労働を援助する器具・道具および建物に投ぜられた労働もまた、それらの商品の価値を變動させる」〔力点——リカアドウ〕と考える。つまりリカアドウは、商品の価値はその生産に投ぜられた「直接労働」の量と、その生産に必要な生産手段（彼にあっては原料が脱落している）に投ぜられた「間接労働」の量との双方の合計によって規定され、したがって商品の価値のうちには、消費された生産手段の価値、すなわち c 部分も包含されていると解していたわけである。リカアドウがこのように、商品価値における c 部分の存在を承認したことは、たしかに彼の功績をなすものと云わねばならない。

しかしリカアドウは、消費された生産手段の価値は、いったいどのようにして商品生産物のなかへ移譲せられるのかという問題を全然研究していない。彼にとつてはただ、商品価値の大きさを規定する投下労働量は「直接労働」量と「間接労働」量との合計だということだけが問題なのである。だから彼は、抽象的・人間的労働なる属性において労働対象に新価値を附加する同じ労働が、同時に、具体的・有用的労働なる属性において生産手段の価値を生産物に移譲するという点、つまり労働のたんに量的な附加によって新価値が附加され、附加された労働

働の質によつて生産手段の旧価値が生産物において維持されるという点にまつたく気づくことができなかつた。彼はただ、一商品たとえば靴下のなかに対象化されている労働を、第一に耕作労働、第二に運輸労働、第三に紡績労働、等々というふうに、いわば並列的に数え挙げることで満足するのである。^{〔註〕}

〔註〕 これをリカアドウ自身に語らせれば、つぎのごとくである。——「たとえば靴下の交換価値を評価するにあたって、われわれは、他の諸物に比較してのその価値は、これを製造し、かつ市場に齎らすために必要な労働の総量によつて左右されることを見出すであらう。第一に、原棉を栽培する土地の耕作に必要な労働がある。第二に、その原棉を、靴下が製造せられるべき国まで運輸する労働があり、そしてそのなかには、運送船舶建造に投ぜられた労働の一部分——それは諸財貨の運賃のなかに課せられる——がふくまれている。第三に、紡績工および織布工の労働、第四に、生産をたすける建物や機械をつくつた技師、工匠および大工の労働の一部分、第五に、小売商人の労働、およびその他細説の要なき幾多のものの労働がある」。

ここでリカアドウが、靴下の交換価値を規定するところの「労働の総量」中に「小売商人の労働」をもふくませて、あたかも価値が流通過程からも発生しうろかのように説いていることはこれを措くとしても、彼が生産手段の価値の移讓様式を立ち入つて研究しようとしていないことは、歴然たる事実である。

ところが、生産手段の価値の移讓様式をリカアドウがまつたく不問に附したというこの事情は、やがて彼の分配論に重大な誤謬をみちびき入れることになる。ここに重大な誤謬と云うのはほかでもない。それは、アダム・スミスが定式化したところの $v+m$ のドグマなのである。すなわちリカアドウは、ひとたびは商品価値における c 部分の存在をみとめたにもかかわらず、商品で表示される労働の二重性を正しく把握していなかつたがゆえに、また生産手段の価値の移讓様式を立ち入つて研究しなかつたがゆえに、スミスのドグマを批判的に解体すること

ができなかつたばかりでなく、却つて彼自身、c部分の存在をいつのまにか忘却して、かのv+mのドグマをそのまま受けつぐことになるのである。たとえば彼はいつている。——「われわれはすでに、穀物の価格が、地代を納めない資本部分を用いてそれを生産するために必要な労働量によって規制されることを見てきた。われわれはまた、すべての製造品の価格が、その生産に必要な労働の多少に応じて騰落することをもすでに見てきた。価格を規制する品質の土地を耕す農業者も、諸財貨を製造する製造家も、いずれも地代としてその生産物の如何なる部分をも犠牲にするものではない。彼らの諸商品の全価値は、ただ二つの部分だけに分れる。すなわち、一つは資本の利潤をなし、他は労働の賃金をなすのである。」⁽⁷⁾

しかし、リカアドウがこのように、アダム・スミスからv+mのドグマを無批判的に受けついで、「生産物価値」(c+v+m)と「価値生産物」(v+m)とを平気で混同していたとすれば、彼のいう「分配」(distribution)なるものが、「生産物価値」の資本と諸所得へのそれではなく、「価値生産物」の賃金、利潤および地代への分配でありえなかつたことはいうまでもない。^(註)まさにこの点に、すなわちリカアドウがその研究領域をたんに「価値生産物」の諸所得への分配の問題だけに限定していた点に、彼の分配論＝分解価値説の致命的な欠陥がある。なぜならば、かくては資本家の階級的地位が一面的に——つまり蓄積の進行とともに年々大巾に増大する資本価値の存在を無視して——その所得形態たる利潤によってのみ規定されることになり、したがつてまた諸階級の社会的・相対的地位が正当に理解されえないからである。ここにおいてわれわれは、リカアドウの価値論そのものの根本的な欠陥が彼の分配論を如何に大きく制約しているかを知るのである。

〔註〕 われわれは、この点をリカアドウ自身の所論について検討しておく。まず当該箇所を示せば左のごとくである。

「われわれが地代、利潤および賃金の騰落を判断するのは、ある特定農場の土地の全収穫の地主、資本家および労働者なる三階級のあいだへの分配に拠つてすべきであつて、可変であること明白な媒介物によつて評価せられたその生産物の価値に拠つてすべきではない。

「われわれが地代、利潤および賃金の率を正しく判断しうるのは各階級によつて取得される生産物の絶対量ではなくて、その生産物を獲得するに必要とせられる労働の量である。」⁽⁸⁾

一見したところでは、第一のパラグラフではリカアドウは、地代、利潤および賃金の騰落は諸階級に帰属する価値の分け前によつてではなく、彼らが取得する生産物そのものの量によつて判断されるべきだと主張しているかのようなのである。しかし実はそうではないのであつて、このことは、彼が第二のパラグラフにおいて、「地代、利潤および賃金の率」は各階級に帰属する「生産物の絶対量」によつてではなく、「その生産物を獲得するに必要とせられる労働量」によつて判断されねばならないと確言する場合に明白となる。リカアドウにとっては、生産物そのものの分配ではなくて、どこまでも生産物の価値の分配が問題なのである。だから、右の章句でリカアドウが主張しているのは、地代、利潤および賃金の騰落は「ある特定農場の土地の全収穫」の価値が地主、資本家および労働者のあいだへ分配される事情にもとづいて判断されるべきだといふ点にはかならない。ところがリカアドウは、まさにかく主張することによつて、同時に、彼にとつて問題なのは「価値生産物」の諸所得への分配だけだということを示しているのである。

とはいへリカアドウは、「価値生産物」の諸所得への分配という限られた問題領域においては、自分にとつて可能なかぎり諸所得の相対関係を研究し、かつ、この研究をつうじて諸階級の社会的・相対的地位を理解することに非常な努力を傾けたのであつた。このことは、たとえばリカアドウがつぎのように主張する場合にはつきりと示されている。——「機械や農芸の進歩によつて全収穫は倍加するかも知れないが、もし賃金、地代および利潤も同じく倍加するならば、これらの三者は相互にたいして以前と同一の割合をたもつてであらう。だから、それ

らはいずれも相対的に変化したとは云えないのである。しかるに、もし賃金はこの増加の全部に与かることができないうで、倍加せずに二分の一だけ増加し、地代は倍加せずに僅か四分の三だけ増加し、のこる増加分は利潤に帰属したものとすれば、わたしは、地代と賃金は下落したのに利潤は騰貴したと云うのが正しいと考える。なぜなら、もしこの生産物の価値を測定すべき不変の標準があるとすれば、われわれは、労働者階級および地主階級にはこれまで与えられていたよりも小なる価値が、また資本家階級にはこれまで与えられていたよりも大なる価値が帰属したことを見出すだろうからである。」と。かようにリカアドウは、賃金、利潤および地代をはつきりと生産物の価値の分解部分としてとらえつつ、これら諸所得の相對關係の研究をつうじて諸階級の社会的・相對的地位を可能なかぎり正確に把握しようとして努めているのである。^(註)

〔註〕 なおこの点は、リカアドウが一八二〇年一月一日附マルサス宛の手紙において次のように述べていることから知られるところである。——「貴下によれば、経済学は富の性質および原因を研究することでありますが、わたしは、それはむしろ勤勞の生産物がその形成に協力するところの諸階級のあいだに分配されるのを決定するその法則の研究にあると思えます。分量にかんしては何らの法則も設定することができませんが、割合にかんしては可成り正しい法則を設定することができます。前者の研究は無益で欺瞞的なものであるが後者の研究こそ経済学の真の目的であるということに、わたしは日毎に満足しているものであります。」⁽¹⁰⁾

ここでリカアドウが強調しているのは、(一) 生産物そのものの分配の「法則」を問題にするがごとき経済学（実はマルサスの経済学を自己体！）は「無益で欺瞞的なものである」という点、(二) 生産物の価値の分配の法則を研究し、かくして諸階級の社会的・相對的地位を正しく把握することこそが「経済学の真の目的である」という点である。

そして事実リカアドウは、資本家階級、地主階級および労働者階級の社会的地位はこれらの階級が自己の所得

として生産物の価値のどれだけを取得するかに応じて決定されると解することによって、さらにまた、利潤、地代および賃金の相対的な変動関係を規制する諸法則を探究することによって、ブルジョア社会における三大階級の社会的・相対的地位を鋭く把握しているのである。いいかえればリカアドウは、利潤・地代・賃金なる諸所得相互の対立的な関係に着眼し、かつこれを強調することによって、同時に、諸階級のあいだの対立的な関係をも正しくとらえているのである。『資本論』第二版への跋においてマルクスが、「リカアドウは、階級的利害の、すなわち賃金と利潤との、利潤と地代との対立をば、素朴にも社会的な自然法則と解することによって、ついに意識的に彼の諸研究の樞軸たらしめている」と語った所以である。たとえ「価値生産物」の諸所得への分配という限られた範囲内においてであつたとはいえ、リカアドウが諸所得の相対的な変動関係を非常な熱意を以つて研究することにより、近代ブルジョア社会の三大階級相互のあいだの對抗関係を明示したことは、彼リカアドウの不滅の功績であり、まことにこの点はリカアドウ分配論の精髓をなしている。⁽¹¹⁾

〔註〕 しかるにマルサスは、リカアドウの分配論がかように、いわば相対的所得論として展開されたことの極めて重要な意義をまったく理解できないのであつて、その証拠にマルサスは、リカアドウが「賃金率」(rate of wages)をとりあつかつて、いることにすっかり驚いてしまつて、「わたしのこれまで接したどの著述家でも、リカアドウ氏以前には、賃金あるいは眞実賃金という術語をば、割合をふくませて用いたものは一人もいなかった」と述べている。⁽¹²⁾

しかしながら、個別的資本の生産物にかんしてスミスのドグマを受けついでリカアドウは、このドグマを社会的総資本の生産物にかんしても無批判的に継承するのである。いわく、「いずれの国においても、その土地と労働との全生産物は、三つの部分に分れる。このうちの一部分は賃金に、他の部分は利潤に、そして残余の部分は地

代に当てられる。」⁽¹³⁾と。社会的総資本の運動においては、個別的諸資本の運動が相互に絡み合っており、したがってそこでは事態がいつそう複雑な様相を呈するのであるからして、個々の商品生産物の価値構成についてさえc部分の存在を忘れ去ってしまったリカアドウが、社会的総資本の生産物にかんしては徹頭徹尾、かの $v+m$ のドグマの継承者となるであろうことは、むしろ当然である。かくてリカアドウは、「土地と労働の全生産物」の価値が「三つの部分」すなわち賃金、利潤および地代に分解するものと解したため、社会的総資本の再生産と流通の問題にその解決をあたえることができなかつた。というよりも、彼はここでもまた問題の所在に気づくことさえできなかつたのであつて、このことにおいて彼はA・スミスよりもはるかに劣っている。^(註)

〔註〕 さきにわれわれは、リカアドウが貨幣の本質を正しく理解しえなかつたがゆえに、一般的過剰生産の可能性を全面的に否定するにいたつたことを見ておいた。ところで、リカアドウが恐慌の可能性を否定しながら、生産はそれ自身でみずからの市場をつくりだすと主張する場合には、彼は、シスモンデイ——剰余価値実現の不可能ということを論拠として、資本制社会では生産が消費を追いこすから総じて資本主義の発展は不可能であると考へたところのシスモンデイよりも、はるかに鋭く資本制生産の一般的傾向をとらえていたのである。なぜというに、事実において資本制生産は、「生産のための生産」、「蓄積のための蓄積」を以つてその一般的傾向とするものであり、実際、資本制社会では生産それ自身が自己の市場をつくりだすのだからである。

けれどもリカアドウは、本文で見たように、アダム・スミスから $v+m$ のドグマを継承して、社会的総資本の再生産と流通の問題を提起しようとさえしなかつたため、資本制生産の右の一般的傾向を理論的に説明することができず、この傾向をば、生産物は生産物によつて支払われるのだから一般的過剰生産なるものはありえないというセーの販路説を援用することによつて説明しようと試みた。そこでまたリカアドウは、なるほど資本制社会では生産それ自身がみずからの市場をつくり

だすではあるが、しかしこの過程は決して摩擦なしに進行するものではなく、むしろ必然的に恐慌——一般的過剰生産を伴うという点を正當に理解することができなかった。

もちろん、この場合われわれは、リカアドウ自身が体験したのは本格的な意味での近代的・資本主義的恐慌ではなく、いわゆる「過渡的恐慌」でしかなかった点を考慮しなければならぬが、しかし、彼が一般的過剰生産の可能性そのものを全面的に否定し、しかもそのさいの主要な論拠をセーの販路説に求めていたことは、彼リカアドウの経済学体系の危機的な表現だと云うべきであろう。けだし、セーの販路説なるものは、資本制生産を単純な商品生産に還元し、さらにこの後者を生産一般にまで単純化する底の「理論」にはかならなかつたからである。

だからまたリカアドウは、「年々の生産物価値」が如何にして資本と諸所得とに分配されるかという問題をまったく顧慮することなく、みずからの研究領域をば、「年々の価値生産物」の賃金・利潤・地代への分配という狭隘な範囲内に局限せざるをえなかつた。しかも、まことに首尾一貫的に！したがって、リカアドウの国民所得論とは「年々の価値生産物」の諸所得への分配の理論以外の何ものでもなかつたのである。そこでわれわれは、つぎのように云つて差支えない。——リカアドウ分配論の限界が、すなわちスミスの $v+m$ のドグマの無批判的な継承（これはまたこれで、リカアドウ価値論の根本的な欠陥たる「労働の二重性」把握の不十分さにもとづいていたのだが）が、リカアドウ国民所得論にたいして大きな制約をあたえている、と。

しかしリカアドウは、アダム・スミスが、資本制社会において問題なのは「総所得」ではなくて、まさに「純所得」だという点を把握していないことを論難しながら、つぎのように述べている。——「その利潤の年額が二〇〇〇ポンドの資本を有する一個人にとっては、彼の資本が一〇〇〇人を雇備するか、それとも一〇〇〇人を雇備するかということ、あるいはまた、生産せられた商品が一〇、〇〇〇ポンドで売れるか、それとも二〇、〇〇〇

ポンドで売れるかということ、彼の利潤が二、〇〇〇ポンド以下に減少しないかぎり、まったくどうでもよいことであろう。一国の真の利害もまた、これと同様ではなからうか？ その真の純所得、すなわちその地代および利潤が同一であるかぎり、その国の住民が一、〇〇〇万人であろうと、あるいは一、五〇〇万人であろうとそれは大したことはない。⁽¹⁴⁾」

すでに見たように、アダム・スミスは、「総収入」と「純収入」とを区別することによって、「年々の生産物価値」と「年々の価値生産物」との混同から免れ、事実上、社会的総生産物の価値構成を $c + v + m$ として把握したのであったが、同時に彼は、資本制社会の「真の富」をなすものとして「純収入」（賃金＋利潤＋地代）を一樣に強調した。ところが、「年々の生産物価値」と「年々の価値生産物」とを完全に混同するリカアドウは、ミスによってなされた「総収入」と「純収入」との区別をすっかり解消してしまう。それと同時に、いまやリカアドウは、「総所得」(gross income)と「純所得」(net income)とを区別し、かつ前者のもとに賃金＋利潤＋地代を、また後者のもとに利潤＋地代を表象しながら、「純所得」が同一であるかぎり、一国の「住民」つまりプロレタリアートが犠牲に供されることは「大したことはない」と断言するのである！ だが、これは資本制社会の冷厳な事実である。リカアドウがかように、資本制生産の規定的・推進的なモメントは価値一般（賃金＋利潤＋地代）の生産ではなく、まさに剰余価値（利潤＋地代）の生産だという点を鋭く認識して、資本制社会の冷厳な客観的事実をかくも高調したことは、彼の科学的公平さを遺憾なく示すものであり、彼の不滅の功績である。かくてわれわれは、ここでもまたリカアドウが、たとえ「年々の価値生産物」の諸所得への分配という限られた問題領域においてであったとはいえ、その範囲内では可能なかぎり科学的な国民所得論を展開していたことを知る

のである。

しかもリカアドウは、ただたんにその価値論にもとづいて自己の分配論と国民所得論とを展開したばかりではなかった。彼は、みずからの科学的理論に立脚しつつ、アダム・スミスの皮相的な見解を極力批判したのであった。すなわちリカアドウは、スミスの支配労働説と構成価値説との非科学性を極めて精力的に論証し、かくしてこれらの俗流的な所説を自己の価値論および分配論から排除した。しかるに、このことは、リカアドウが、かの「三位一体的範式」を批判的に解体したことを意味するものにはかならない。なぜなら、前章で詳論したように、アダム・スミスは、その支配労働説と構成価値説とを論述することによって、「三位一体的範式」——社会的生産過程のいっさいの秘密を包含するところの「三位一体的範式」を定式化していたのだからである。というよりも、スミスの支配労働説および構成価値説はまさにこの範式それ自身だったからである。したがってこういえよう。——リカアドウは、その価値論と分配論とを展開することによって、ブルジョアの生産諸関係を科学的に分析し、近代ブルジョア社会の内的編成を鋭く把握していただけない、彼はさらにこの把握にもとづいて、「三位一体的範式」の定式者としてのスミスに批判を加え、こうして社会的生産過程のもっとも現象的な表現たるこの範式そのものを解体したのである、と。ここにわれわれは、リカアドウが、皮相的な観点に立つA・スミスに批判の矢を放ちながら支配労働説および構成価値説を排除したことの優れて重要な意義を見出すことができるであろう。実際リカアドウは、アダム・スミスとは異なつて、どこまでも古典経済学の任務を忘れることなく、意識的・自覚的に、この任務を果さんとしたのである。マルクスが、リカアドウの科学的功績を評価して次のこと云つた所以もここにある。——「アダム・スミスとは反対に、ダヴィッド・リカアドウは、労働時間による商品

価値の規定を苦心の結果純粹に仕上げ、この法則がそれと一見矛盾するように見えるブルジョアの生産諸関係をも支配することを示した。」〔力点——マルクス〕⁽¹⁵⁾

- (1) K. Marx, Das Kapital, II. Bd., S. 190. 長谷部訳、第六分冊、一二五ページ。
- (2) D. Ricardo, Principles, p. 1. 小泉訳、三一ページ。
- (3) K. Marx, Zur Kritik, S. 230. 宇高訳、三四ページ。
- (4) 小泉信三・『経済学及課税之原理』(解題)、四三二—四三三ページ。
- (5) D. Ricardo, Principles, p. 17. 小泉訳、一八ページ。
- (6) D. Ricardo, ibid., pp. 18-19. 上掲書、二〇ページ。
- (7) D. Ricardo, ibid., p. 87. 上掲書、九一ページ。
- (8) D. Ricardo, ibid., p. 41. 上掲書、四四ページ。
- (9) D. Ricardo, ibid., pp. 41-42. 上掲書、四四ページ。
- (10) Letters of D. Ricardo to T. R. Malthus, ed. by J. Bonar, p. 175.
- (11) K. Marx, Das Kapital, Volksausg. bsgt. v. M.-E.-L.-Institut, I. Bd., S. 12. 長谷部訳、第一分冊、一二三ページ。
- (12) T. R. Malthus, Definitions, p. 29. 玉野井訳、三一ページ。
- (13) D. Ricardo, Principles, p. 336. 小泉訳、三四一ページ。
- (14) D. Ricardo, ibid., p. 336. 上掲書、三四二ページ。
- (15) K. Marx, Zur Kritik, S. 48. 宇高訳、八三ページ。

四 問題の総括

以上を総括するにあたって、われわれはまず、アダム・スミスが価値論および分配論の領域においてどの点でリカアドウよりも優位していたかを想いおこすことからはじめよう。

(一) アダム・スミスは、商品の価値をその生産に必要な労働の量によって規定するばかりでなく、社会的分業がもたらす変化に着目して、「商業社会」における私の労働と他人の労働との等置を強調し、まさにそうすることによって商品価値の実体を把握しようと試みた。(二) A・スミスは、「資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社会」が終焉するとともに事態にどのような変化がおこるかに深い関心をよせ、かくして資本と賃労働とのあいだの交換の問題を提起した。(三) A・スミスは、利潤の源泉にかなする研究にとりわけ注意をそそぐことによつて、事実上、利潤を剰余価値として把握したばかりでなく、さらにこの剰余価値を生産過程において積極的に剰余労働に還元した。(四) A・スミスは、商品の価値は結局のところ賃金、利潤および地代に分裂するという彼のドグラをば、他の箇所では自分自身によつて否定し、こうしてみずからにおいて前後撞着しながらも、社会的総資本の再生産と流通の問題を提起し、科学的な国民所得論への道を開拓した。——これらの点において、アダム・スミスはリカアドウよりも優れていた点である。そして、これがスミスの歴史感覚にもとづくものだという点はわれわれがしばしば指摘したところである。

しかしながら、アダム・スミスは、そのブルジョアの立場に制約せられて資本制生産様式を生産の永久的な自然形態だと見做したため、商品の価値形態を商品価値の必然的な現象形態として把握することができなかった。

そこでまた彼は、投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定とを無造作に混同して、「初期未開の社会」においてはこれら二つの価値規定がともに妥当すると解したのであった。ところがスミスはまた、労働と労働力とを混同していたので、資本と賃労働との交換の問題を価値法則にもとづいて正しく解決することができなかった。その結果、彼は、資本関係の出現とともに価値法則そのものが止揚されるかのように考えて、「文明社会」では支配労働だけが妥当すると宣言し、かつ、みずからの構成価値説を論述するにいたつたのであった。つまり、スミスの投下労働説と分解価値説とに内在していた根本的な欠陥そのものが、彼をして支配労働説と構成価値説とを記述せしめる契機となつたわけである。

かくしてA・スミスは、一方では科学的な把握様式のもとに投下労働説と分解価値説とを展開し、こうして古典経済学本来の任務を遂行したが、同時に彼は、他方では皮相的な把握様式のもとに支配労働説と構成価値説とを論述し、まさにそうすることによつて「三位一体的範式」を定式化した。しかもスミスは、この二つの相反する把握様式を平気で交錯させたのであつて、ために彼の価値論においては投下労働説と支配労働説との動揺的な展開が、またその分配論においては分解価値説と構成価値説との交錯的な展開が見受けられたのであつた。換言すればスミスの場合には、価値論および分配論における二重性が基本的な特徴をなしていた。そしてこの二重性はとりもなおさず、A・スミスが、古典経済学者であると同時に俗流経済学者でもあつたことを意味するものにはかならなかつた。実際、アダム・スミスの場合には、いわばその半身だけが古典経済学の領域に属しており、他の半身は完全に俗流経済学の領域に属していたのである。だからわれわれは、アダム・スミスは意識的・自覚的に自己を古典経済学者たらしめようとはしなかつたと云いうるであらう。また、それゆえにこそマルクス

は、経済学が「A・スミスにおいて一つの大きな全体にまで発達し、その包含する領域は或る程度完結した」ことをみとめると同時に、彼スミスが「非常な素樸さを以つて絶えざる矛盾のなかに動いている」⁽¹⁾ことを指摘したのである。スミスが二つの世界に、すなわち古典経済学の世界と俗流経済学の世界との双方の世界に住んでいたことが——スミスのこの二重的な性格が、科学的経済学の発展史上において占める彼の地位を非常に制約していることは、もはや明白なところであろう。

ところで、ダヴィッド・リカアドウは、A・スミスからその科学的な把握様式を継承してこれをわがものとしたのであった。したがつて彼の場合には、価値論における投下労働説と支配労働説との錯綜も、また分配論における分解価値説と構成価値説との交錯も見られなかった。否むしろ、彼の価値論および分配論においては首尾一貫性が基本的な特徴をなしていた。そしてこのことは、リカアドウが古典経済学の本来的な任務をば、意識的・自覚的に遂行したことを意味するものにはかならない。

しかもなおリカアドウは、A・スミスの支配労働説と構成価値説とに批判を加えて、これを自己の価値論および分配論から排除した。別言すればリカアドウは、「三位一体的範式」を批判的に解体することに非常な努力を傾けたのであった。それゆえ、つぎのことは明らかである。すなわち、リカアドウが俗流経済学の世界に住むことをいさぎよしとせず、どこまでも古典経済学者たらんと欲していたということ、そして事実リカアドウは、その価値論⁽²⁾||投下労働説と分配論⁽²⁾||分解価値説とを展開することによつてこの願望を果したということ、これである。マルクスが、「古典経済学の完成者」というこの名譽ある称号をば彼リカアドウに与えることを惜しまなかつた所以は実にここにある。

けれどもリカアドウは、価値論および分配論の領域において多くの点でスミスよりも劣っていた。いま、その主要な諸点を列挙すれば次のごとくである。すなわちリカアドウは、(一) 価値の大きさの問題だけに注意を奪われて、商品価値の実体をなす労働の特殊性な性格をとらえようとしなかった、(二) 資本と賃労働とのあいだの交換の問題をまったく不問に附した、(三) 資本家にとつての利潤の存在を当然のこととして、利潤の本源にかんする研究を怠り、剰余価値を剰余労働にまで還元しなかった、(四) スミスの $v + m$ のドグラマを無批判的に受けついで、社会的総資本の再生産と流通の問題を提起しさえしなかった。——これらの諸点においてリカアドウは、アダム・スミスよりもむしろ劣っていたのである。そしてリカアドウがこのように、理論的に甚だ重要な諸点においてスミスから一步後退するにいたつたのは、われわれが繰りかえし述べておいたように、彼がまったく歴史的観点を欠除していたからである。

ところで、ブルジョアの生産様式を極度に絶対化していたリカアドウとしては当然のことながら、彼はつぎの諸点においてスミスを乗りこえることができなかった。——(一) リカアドウは、 $A \cdot$ スミスと同様に、商品で表示される労働の二重性を正しく理解することができず、ために商品を使用価値と価値との統一として把握することができなかった(もつともリカアドウは、商品の二要因をみとめてこれらの相互関係を研究した点ではスミスよりも優っていたのだが)。 (二) リカアドウは、スミスと同様に、商品の価値形態を完全に無視した^[註]がゆえに、貨幣を商品価値のもつとも発展せる現象形態としてとらえることができなかった。(三) アダム・スミスと同様、リカアドウもまた、日常的な諸用語をそのまま採用することによって、労働力の価値の転化形態たる賃金と、剰余価値の転化形態たる利潤および地代とのあいだの本質的差異を不明瞭にしていた。——つまりリカアドウは、(一) 労

働の二重性把握の点、(B) 貨幣の本質把握の点、および、(C) 科学的諸範疇の定立の点において A・スミスを乗りこえることができなかつたのである。

〔註〕 価値形態の無視にかんしてはスミスとリカアドウとは軌を一にしているというこの点は、周知のごとく、マルクスによつて次のように指摘されている。——「古典経済学の根本的欠陥の一つは、それが商品および特に商品価値の分析からして価値をまさに交換価値たらしめるところの価値の形態を見つけたことに成功しなかつたということである。A・スミスやリカアドウのごときそのもつともすぐれた代表者たちにおいても、古典経済学は、価値形態をまったくどうでもよいもの、あるいは商品そのものの本性にとつては外的なものとしてとりあつた⁽³⁾」。〔力点——マルクス〕

かようにリカアドウは、理論的に極めて重要な諸点において A・スミスの欠陥を克服することができなかつたのであり、しかも彼は、同じく理論的に重要な諸点でむしろスミスよりも後退してさえたのである。そして、価値論および分配論におけるリカアドウのかかる弱点は、やがてスミスへの彼の批判をひどく一面的なものにし、またしばしば、スミスの所説にたいする彼の誤解をさえ生ぜしめることとなつたのであつた。たとえばリカアドウが、彼自身は価値の実体把握を試みようとしないうで、そこではスミスが現実的労働から基本形態におけるブルジョアの労働への移行をなしとげようとしていたところの一文をすっかり誤解してしまつて、スミスにたいしてまつたくまとはずれの批判を加えたことを想起せよ。あるいはまたリカアドウが、彼自身は資本と賃労働との交換の問題を提起しようとしないうで、あたかもスミスが資本制社会における投下労働量と支配労働量との同義性を主張したかのように考へて、彼を不当に批難したことを想起せよ。

だからこういへよう。—— 価値論および分配論の領域でリカアドウがおこなつたスミス批判なるものは、彼

自身の価値論および分配論に内在する根本的諸欠陥のために甚だ一面的なものとなっており、したがってまたリカアドウは、「三位一体的範式」を徹底的には解体しなかつた、と。実際、「三位一体的範式」にたいするリカアドウの批判は、所詮、ブルジョアの限界内において可能なものでしかなかつたのであつた。否、そればかりではない。リカアドウは、彼自身によつて批判的に解体されたこの範式にしばしば立ち帰つてさえるのである。このことは、リカアドウが一般的過剰生産の可能性を否定するにさいしてセーの販路説——資本制生産を生産一般にまで還元する「理論」以外の何ものでもないセーの販路説を平然と援用したことから明らかである。さらにまたリカアドウが、生産ではなくて分配こそが経済学の本来の対象だと宣言したのも、実はと云えば、彼リカアドウが、生産諸要因そのものを明確に歴史的・社会的規定性において把握しえなかつたため、一定の歴史的に規定された生産こそが経済学の本来の対象であることを直接的に宣言することができなかつた、という事情にもとづいていたのである。^(註)

〔註〕 だからこそマルクスは、リカアドウの「分配宣言」を批判して次のように述べたのである。いわく、「ここにもまた、生産を永遠の真理として展開し、歴史を分配の領域に封じ込める経済学者たちの愚劣さが伴っている。」⁽⁴⁾と。

しかしリカアドウの場合には、この「経済学者たちの愚劣さ」はたんに「伴っている」程度である。ところが、J・S・ミルがつぎのように主張するさいには、それが申し分のないほど完全に定式化されている。——「そもそも富の生産にかんする法則や条件は物理的真理の性質を帯びているものであり、したがつて、人の意のままになるというようなところが少しもない。……しかるに、富の分配については事情が異なっている。それはもつぱら人為の制度なのである。……富の分配の規則は、社会の支配的階級の意見と感情のままに形づくられるものであり、しかも時代と国によつて大いに異なるものである。そのうえ、それは人間の望み次第でいつそう異なりうるものである。」⁽⁵⁾

しかしながら、リカアドウの価値論および分配論に内在していた右の根本的諸欠陥は、たんにミスにたいする彼の攻撃を一面的なものたらしめ、かくして「三位一体的範式」への彼の批判を不徹底に終らせただけではなかった。そうではなく、それらの欠陥は、やがて彼自身の価値論および分配論を崩壊にみちびくことになるのである。別言すればリカアドウの経済学体系は、その解体の諸契機をそれ自身のうちに包含していたのである。古典経済学の完成は、同時にその危機でもあつたわけである。

- (1) K. Marx, *Theorien*, II Bd. I. Teil, S. 2. 大森訳、二ページ。
- (2) K. Marx, *Zur Kritik*, S. 49. 宇高訳、八四ページ。
- (3) K. Marx, *Das Kapital*, I. Bd., S. 47, Anm. 32. 長谷部訳、第一分冊、二七一ページ。
- (4) K. Marx, *Zur Kritik*, S. 231. 宇高訳、三四一ページ。
- (5) J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, 1873, II. Bk. I. Ch., pp. 123-124.